
我龍転生

キーダの滝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我龍転生

【Nコード】

N9784X

【作者名】

キーダの滝

【あらすじ】

物語の舞台は我等が星、地球。その中の貴族、お金持ちなどセレブが集まる街「セレブリティタウン」そのの最もお金持ちの少女、

千里 加奈

と執事、綾風 ヒロト、そして、謎の少年。

三人が交わった時、新たな物語が始まる・・・

プロローグ（前書き）

作者のキーダの滝です！（変な名前WWW）
初の投稿です。

皆様が読みやすいと思える作品にしていただきたいので
皆様の意見があればドンドン採用させて頂きたいと思います！
是非読んでください！
お願いします！

プロローグ

ここはお金持ちや貴族達が集まる町

「セレブリティタウン」の一番地（最高のお金持ち達が集まる場所）そこに誰よりもお金持ちな少女

名前を「千里^{せんり} 加奈^{かな}」という
成績優秀、おまけに容姿端麗

しかし、十分に出来すぎているため

貴婦人1「まあ、天才さんが出てきましたわよ」

貴婦人2「今日も、他人を醜いものを見るような目で見てらっしゃるわ」

のような事もある

しかし

婦1・2「キャ~~~~~!」

「水をかけたのは誰!？」

? 「申し訳ありません婦人方達、あまりにもお美しいので花かと思
いましたよ」

彼は千里家の執事長、名前は「綾風 ヒロト（あやかぜ ひろと）」
執事能力にとっても長けていて、様々な事務がこなせる

「別にそんな事しなくてもよかったのに・・・」

「いや、こうしなければいけない理由がありましたので」

「理由ってなにかしら？」

「いや、お嬢様が手に持っているものがわかりますか？」

「包丁」

「ですよね」

「何がだめなの？」

「ああでもしなかったら、あの人達を刺していたでしょう？」

「最近、人を料理するのに興味ができて」

「それは、絶対に言うてはいけない！」

そんななか、同時刻・・・

少年「ククク・・・ついに、ついに、この時が来たッ！」

青年「ハア・・・うるせえ奴だな」

「だってだってだってだってだッ！」

「ちょ、うるさいから」

「だってよ、ついに来たんだぜ！待ちわびた1607歳の誕生日！
ついに来た！」

「お前の誕生日なんざどーでもイイケドよお・・・」

「そして俺は行く！別世界へ！」

「浮かれて目的忘れんなよ」

「わかってる、わかってるぜ！とにかく頼むぜ！」

「ハイハイ・・・んじゃいくぜ」ウィーン ガチャ

「んじゃ、別世界転送装置軌道！」

「うっし！行ってきます！」

ヒュン！

「まあせいぜいきをつけるこったな・・・土助・・・」

そして、二つの話が繋がり物語へと変わる・・・

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

変な部分がきつと所々あると思うので見つけましたらご指摘
お願いします！

それと、物語の謎などがあると思いますのでそこは
皆様が知りたいと思ったら投稿させて頂きます
最後までお読み頂きありがとうございます

第1話「不思議な風刺の少年」（前書き）

感想書いてくださった方、ありがとうございます
こういうのが励みになって有難いです！

今回、二つは一つになります

バトル展開のある物語なのですが結構遠いです
楽しみにして下さってる方すいません、もう暫くお待ち下さい
では本編へどうぞ

第1話「不思議な風刺の少年」

「ム！お嬢様、空を見上げてください、鳥が元気に飛んでらっしゃいますよ」

「今日は焼き鳥ね」

「やめろォ！」

「チツ・・・！ん？あら、鳥が一匹こちらに飛んできているわ」

「今、舌打ちが・・・ム、本当だ一匹こっちに　　っていうか大きすぎませんか」

「近づいてきているからじゃない？」

「なるほど、というかとんできているというか落ちてきているという方が正しいような・・・」

「落ちてきているわね」

「やっぱり落ち

ズドンッ！！

「・・・人だ、っていうか、人！？ヒト！？なんで！？うえから！？ヒトォ！？」

「落ち着きなさい。今ならまだ間に合うわ」

という彼女の手にはスコップがあった

「証拠隠滅！？解決してねえ！どどどどどうすれば！いいんだ！？」

あせるヒロトとはべつに地面を掘っている加奈

「早まっちゃいけません！」

すると、偶然そこを通りかかった老紳士が

「人が！人が死んでいるぞ！」

しばし、沈黙をおいたあと通行人は一斉に

「イヤーーーーーー！！」「人殺し！？」「やっぱり、そういう

人間だったのよ！」「恐ろしい！」

通行人が口々に言ったあとヒロトが

「ちょ、ちょっと待ってください！勘違いです！そもそも、僕たちが殺したという証拠は・・・」

「そのこがもっているものがなによりの証拠じゃないのよ！」
「へ？」

そういわれて指が刺している方向を見てみるとついさっきまで持っていたスコップに加えさっき持っていた包丁をもう片方のてに持ち光らせていた

「何してんだアンタは！！！！」

ヒロトの叫び声だけが悲痛に響く・・・

その後、ヒロトの必死の言い訳により「スコップで穴を掘りたくなつてそとにでてみるとひとが倒れていて料理を食べさせようとしていた」という内容で収まった

一時間後

「ふう、それじゃあ後お願いします、マリアさん」

「はい、わかりました」

「おきたら知らせてください。僕は一回にいるんで」

「ハイ」

ボタンッ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それにしても不思議ですね、空から落ちてきたのに骨一本すら折れていないなんて・・・」
「というわけである。」

いまこのベッドで寝ている少年、鳥が飛んでいるような高さから落ちて骨一本どころか超健康体であった
どういことなんだか・・・

コンコン！

コック「マリアさん！申し訳ないんですがてを貸していただけませんかね？」

「調理に人手が足りていないんですか？」

「ハイ、一人今日欠席者出ていまして・・・それで、てを貸していただけないかと・・・」

「すいませんが他をあたっていただけるとうれし・・・ん？」

すると、さっきまで気絶していたかのように眠っていた少年が突然目をさまし

「飯・・・料理・・・」

「!だ、大丈夫ですか!どこも悪くないんですか？」

「・・・をよこせ・・・」

「へ?いまなんて・・・?」

「・・・しを、飯をよこせえええええええ!!!!」

すると、少年は飛び起きて外へとはしっていった

全

身包帯で・・・

「こっちか!?こっちだ!」

道にいたメイド、執事を吹っ飛ばすかのようなスピードではしっていった。

そして、しばらくすると少年は厨房の前で止まり中へといった

時間も経たないうちに厨房からは声が聞こえてきた

料理長「おい、キミちよつと!!」

「飯だ!うまそーな飯がある!目の前に!いただきます!」

すると少年は一分もしないうちに大鍋の中のシチューを飲み干した、その次にはパスタ、次に魚に活造りと順に厨房のもの全てを食べつくした

とうとう少年は腹いっぱいになったようで

「フーもう食えねえや、腹いっぱいだぜ」

料理長「いや、キミちよつと・・・」

「あ、なんだ?あ、もしかしてこれ全部おっさんのだったのか!やーわりいわりい腹へってたもんでよ!まあ気にしねーでくれよ!あと美味かったぜ!」

「いや、じゃなくて君包帯だらけで大丈夫なのかい」

料理長はそんな人柄であった　　ついでに料理が美味かった事に

満足をおぼえたらしい

「お、俺のこと気にしてくれてんのか？やー人間って言い人なんだな！大丈夫！俺はげん」

そこに、ヒロトがやってきて

「何事だ！」

「んお？」

「なっ！何故、何事もなかったかのように動いている？！」

「んー、それは」

そして加奈が来る

「うるさいわよ」

「さっきからいっぱい来るなー」

「ん？なんだアンタ生きてたのね、いいけどうるさいから静かにして」

「やー悪かった、すまん」

「解ればよし」

「良くないです！なんでそんな平然としていられるんですか！？」

「そもそもあんな所から落ちてきて無事ならいきてもおかしくないでしょ」

「う！そうですが・・・」

「アンタ名前は？」

「ん？俺か？」

すると少年は机から降りて二人の方をむいて

虹色 土助「俺の名前は虹色 土助！小民族、玄龍族、の生き残りだ！」

それがあらたな物語のはじまり・・・

第1話「不思議な風刺の少年」（後書き）

今回も楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただければ、うれしいです

ところで、物語の矛盾点やここがおかしいなどあれば
かまわず指摘してください

間違っぱなしで表示してるのいやなのでWWW

とにかく呼んでいただき誠にありがとうございました

第2話「謎が謎を呼んだ謎少年」（前書き）

どうも

おはようございます

こんにちは

こんばんわ

朝から夜まで元気ではないキーダの滝です

作者名変すぎますよねww

自分で書いててわらうこともあったり

何はともあれ2話です

前書きの部分かたつくるしくありませんか？

敬語うつとうしくないですか？

スイマセン、これがうつとうしいですね

なので、今回から何かいろいろなこと書いて行きたいと思います
前々から気になってんですけど

話打つときに羽になるのっておれだけなんすかねえ？

前書き長いな・・・

無視して本編どうぞ

第2話「謎が謎を呼んだ謎少年」

「俺の名前は虹色にじいろ 士助しすけヨロシク！」

「虹色士助……」二人は声をそろえて言った

「そして、玄龍族ってなんだ？」

「んー、玄龍族ってのはなあ……なんだったっけ？」

「って忘れたのかよ！」

士助に変わってナレーターが説明

玄龍族……

遙か何年も前から人間の住んでいる世界とは別にもう一つ世界があるってその世界に存在する種族。

もつと詳しく知りたければ作者に

「なるほど……ナレーターさんありがとうございます、それで少数民族族っていうのは？」

それも作者へ

「それでなんで異世界の人間が別世界に来ているんだ？というか別世界なんて存在するわけないだろ！」

ヒロトは全く信じていない　　というか信じるというほうがむりがあるが……

「そうね、確かに信じるというほうがむりがあるわね」

……

「そもそも、そういうなら証拠を見せてみるよ！」

士助は黙り込んでいる

「士助は黙り込んでいるわね……」

……

「どうなんだ！なんとか言ってみろよ！」

士助は目を閉じた

「士助は目をとじたわ」

「っていうかナレーターをリピートするのをやめて下さい……！」

「だって何も言う事ないんだもの」

「いや、だからって…」

「伏せろ！」

次の瞬間！

パリンッ！！

と窓ガラスの割れた音と同時にバケモノが入ってきた！

ヒト、ではない 動物、でもない 何とも言い表せないバケモノが入り込んできた

その形を言い表すならばヒトよりも数倍大きく…大きな鉤爪を持っている

そのバケモノは辺りを見回した後

「サイショノエモノはオマエダアアアアアア！」

といって加奈に襲い掛かった！

そこに、加奈をかばうようにヒロトが立ちふさがった！

（ッ！このままじゃ…！）

もうだめだ…と思いをめをつぶった

………え？

何故、なにも起こらない？襲い掛かったんじゃないのか？なにも感じないぞ？

と目を開けてみると…

ズウウウウンと音と共にバケモノは目の前に伏していた

刀傷が二つあったがそれが原因か？

と考えているとその後ろには刀を持った士助がさっきと変らない状態で爪楊枝を口でプラプラさせていた

（まさか、アイツが…？そんな、まさか…でも仮にアイツが倒していたなら全ての辻褄が合う！）

遙か上空から落ちてでも死なない…玄龍族は別世界の種族…そんな全てのことが…

「怪我とかねえか？」

士助はやっと口を開いた

「オマエ・・・やっぱり」

（でも…まだ…）

‘信じ切れない’ 気持ちがある

「信じ切れないねえ…」

「!？」

（今、心を?!）

「証拠が欲しいんだろ？ んじゃそのお嬢さんにでも聞いてみな」と士助は刀で加奈の方を指している

「……」

本人はしばし沈黙したあと

「そんな物向けないでくれる？」

「ん？ ああ、スイマセン」

というやりとりのあと

「そうね、確かに私は証拠になるわね」

「？ 一体、どういう」

「見たの」

「…え？」

「私、アイツがバケモノを切る所見たもの」

「ということは…」

「アイツ…人間じゃあないわよ」

その場には静けさだけが残った

第2話「謎が謎を呼んだ謎少年」(後書き)

2話いかがでしたでしょうか？

皆さんに楽しんでいただければ有難い
前書き長くてすんません

まとめるのが下手なもんでして

出来るだけ努力させていただきます

それではまた次話お会いしましょう
さよーなら

第3話「昔の重い思い出」(前書き)

どーも皆さんキーダの滝です

突然ですがこの小説を見てくださった方達は嫌でなければコメントを書いていただきたいです

勿論書いてくださった方には感謝ですが出来れば皆さんの意見を
取り込んでいきたいです

上から物言いのようですがどうぞご協力していただきたいです
お願いします

ソレはさておき、3話をどーぞ

第3話「昔の重い思い出」

暫く続いた沈黙を断ち切るようにヒロトは言った

「本当・・・なんですか？」

コクリと頷く加奈

「バケモノが切りかかった時にどこから知らないけど刀を出してあんたが目つぶった時にはもう

…………切ってたわ」

「そんな・・・」

「ま、お前は今の奴倒すのは無理だったけど気にすんな！おれが来たのはそれが理由でだな、それで…」

お前にはむりだった…？実力が足りない…？クソッ！クソッ！おれには無い？俺に俺に…

力が無い……

「だから俺が来たってこ…」

「黙れ！」

うおっ！っと士助は驚き

「俺には力が無い？そんなことは…そんなことは…」

「んだよ！そんなこと気にしてんのか？だーから、そのために…」

「そんな事なんかじゃあない！！」

そういうとヒロトは外に出て行った

「？？どうしたんだアイツ…？」

「アンタが悪いに決まってるじゃない」

加奈は士助にはっきり言った

「ん？俺？」

「アイツ、昔にトラウマ持ってたのよ」

そこで、加奈は説明をはじめた

「アイツ…ヒロトが小学校の時、いじめられてた奴を助けようとしていじめてた奴に喧嘩売ったのよ」

「そんで？」

「結果はボロボロにされたわ」

「！！」

「別に弱かったわけじゃないし、なんなら強い方だったの、でも相手は自分より上の学年、

実力とかじゃなくて歳の差がでたわけ」

「んだよそれ…」

「なによ、アンタがどう思ったわけ？」

「その強かったやつはどいつだァ！」

「今はもう居ないわよ、というか行方を知らないだけ、ていうかアンタが仇とらなくても今のアイツならそいつはひとひねりでしょうね」

「……」

士助は何かを考えていた

「俺、謝ってくる！」

タッタッタ…と士助は外に向かった

「ハァ…暑苦し…」

ヒロトは外で考えていた

（確かに勝てなかった…でもでも！）

とその時目の前の空中に穴が現れ、中から手が攻撃してきた！

ヒロトは何とか回避できたがなからバケモノが出て来て来てヒロトに襲い掛かった！

ヒロトの機敏さはずば抜けていたので相手の攻撃の瞬間を見切って攻撃をかわし続ける

そして、近くにあった鉄パイプをとって相手の後ろに周り攻撃に差し掛かった瞬間

バケモノは思ったより反応が早く後ろを振り向きヒロトに攻撃した間一髪でガードしたもののガードに使用したパイプは折れバケモノは早くも二撃目に差し掛かっていた
もうダメか…！

その瞬間にバケモノが吹っ飛び、起き上がり攻撃をしたものの方を向くとそこに居たのは士助だった

士助はそのバケモノよりも、なによりも早く移動し気づけばバケモノは真っ二つに切り裂かれていた

士助は刀を鞘に納めるとヒロトの方を向いた

「大丈夫だったか？」

ヒロトは声をかけられるとやっと動き立ち上がると士助にむかって

「また、馬鹿にしに来たのか？」

「そうじゃねえ！俺は謝りに来たんだ！」

「は？」

「スマン！俺はお前のこと知らずに偉そうなことばっか抜かして、そんで…」

えーとえーと、と言っている士助を見てヒロトは

（何だコイツ？謝りに来た？変な奴だけど他よりかは違う何かが・・・）

ヒロトは生涯相手が悪いパターンに出くわしてきたものの相手に謝罪されたのは初めてであった

それ故、違和感というものを感じ取っていたのだ

なので士助の行為に当たり前を感じ取れずそれはもう可笑しかった

「んでもって…えーとだな…その俺が悪い理由が…ってあれコレ二回目だっけ？」

そんなことをやっていると

「プッ！クク…アッハハハハハハ！」

「なんだよ、悪いのかよ！物覚えが悪いんだ俺は！」

「アハハハ…！変な奴だなお前！」

「？何がだ？」

「もういいよ、謝らなくて」

「何でだよ！悪いのは俺なんだぜ！まだ気がすまねえ！まだ謝る！
ってどこからだっけ？」

「本当に気にしなくてもいい。そのかわり…」

「ん？」

「俺と仲直りだ」

するとヒロトは手を差し出した

「ん？握手か？」

「そうだ。仲直りした時は握手だ」

すると、土助は笑って手を差し出し二人は握手を交わした

「ニシシ！」

「フッ！」

二人はその後一緒に戻って加奈に仲直りでもしたの？と言われて笑った

ヒロトから重い思い出が消え去った思い出であった

第3話「昔の重い思い出」(後書き)

えー、3話お楽しみいただけたでしょうか

僕としては今回変な部分があった気がするんですがそう思った方はご指摘お願いします

それはそうと、今書き溜めしているんですがなんか前の話と繋がっていたかな？

などと不安があったりしてなんか違和感があって・・・

突然ですが、読者の方々はこの小説は面白いですか？

自分は面白いと思うんですが皆さんが楽しいと思えるかな？と思いますり・・・

何はともあれ、最後まで読んでくださった方ありがとうございます
また次回お会いしましょう

それではさようなら

第4話「住処と仕事をください」(前書き)

ども、いつもどうりキーダの滝です

特に書くこと見当たらないんで今、はまってる物の話とかしようと思います

最近はずっとFF零式やってます

中々難易度高いっていうか敵割と強いんですよ
でも面白いです

それはそうと本編へどうぞ

第4話「住処と仕事をください」

「いや、笑ってる場合じゃないわよ」

加奈は士助に向かってそういった

「こっちの世界に来てあんた住む場所あるの？」

「無い」

「いや、簡単に無いっていつでも・・・じゃあどうするんだ？」

「そこら辺に住む」

「・・・・・・」

そこら辺に住むって・・・簡単なことでは無いぞ士助

二人は同時に思った

「せめて住む場所くらい与えてあげてもいいのでは・・・」

「やだ」

「じゃあ、しょうがねえな」

「って諦めずに粘れよ！おまえこのままじゃ野宿だぞ！」

「だって、仕方ねえじゃん」

「だけど！」

「うるさい」

加奈は二人に向かってそう言い

「タダで住ませるのなんてまっぴらごめん、だけどアンタが住む条件を元に働くのならば住ませて上げてもいいわよ」

そう、千里家の使用人は全員一生懸命働いている、なので屋敷に住ませて貰っているものがほとんどである

「たしかに、それなら！な、士助おまえもここで働けばいい！」

「働く？それってどの種族を滅ぼせばいいんだ？」

「どういう働きを見せるつもりだ！ていうか冗談でいてないから怖え」

「まあ、主に屋敷の掃除、料理、他の手伝い、そんなとこね」

「なるほど、おーし俺頑張るぜ！」

「じゃあコレがあんたの仕事ね」

そういつて加奈が出した仕事のメニューは普通の使用人の5倍のメニューであった

「つてあんた本気？これ五倍のメニューですよ？それ初心者に押し付けるって・・・アンタ正気じゃねえ！」

3時間後

士助は、五倍のメニューを

3時間でやり終わらせた

「つていうかお前もお前だよ！出来ちゃうのかよ！平然とした顔でいんじゃないよ！」

その士助は椅子に座っていた

「だって思うより簡単だったぜ？楽勝楽勝！」

「なら、いいけど・・・」

「まあコレくらい出来ないとかビにしているわよ」

加奈は出来て当然だと思っていたようだ

「じゃあ明日はこれね」

と言って加奈が出したのは先ほどの5倍メニュー

の10倍のメニューであった

いや、あんた鬼とおもったが声に出さなかったヒロト

「チャンスは3日ね」

「おうわかった」

ああ・・・コレから先一体どうなるんだ？

というわけでその3日後　ではなく次の日

そう、士助は・・・士助は・・・こなした5倍メニューの10倍メニ

ユーを　１日で

（ありえねえ・・・）ヒロトは勿論そう思っていた
なんなら３日なら２日ぐらいなら簡単にチヨチヨイっとやってしま
うんじゃないかと

しかし、想像を遥かに凌駕し１日でこなした

士助って一体・・・ソレはヒロトだけではなく課題を出した加奈本
人ですら驚いている

本人は今、厨房で朝ごはんの途中

そんなことをおもっている

使用人のひとりがやってきて

使用人「お嬢様！大変です！彼が…彼が…！」

「！なにかしたの！」

「他の使用人の仕事を全て含めて済ませてしまいました！それも１
週間分！」

「あ…」

そういえば…

加奈は仕事のメニューを考えていた時、最初は割り振られていない
所に士助を当てはめていたが
５×１０倍メニューを考えていた時、めんどくさいと思って適当に
作ってしまったのであった

加奈はイジワルがしたかった、最初の仕事が楽勝？想定内よ、だっ
たらもっとキツイのだから

くるしませてあげるわ！とかんがえていてそれ以外のことを一切考
えずにつくってしまったため

引き起こした結果がコレであった

そして、加奈は実はドＳであった

「私達はどうすれば・・・？」

「うう…」

加奈は考えた結果

「１週間先まであんた達の仕事はナシでよし！給料もちゃんと払う

！だけどナシでいいわ！」

思い切った考えだったが仕方なかったのだ

しかし、ここで士助を止めなければいけない

だが、加奈はソレすらも考えていた

「士助！ちよつと来なさい！」

ういゝといって大きな鍋を持ちながら来た士助に対して加奈は

「士助！あんた学校行きなさい」

「学校？」

士助は学校へ行くことになった

・・・・後半俺のセリフ無しか、と思うヒロトであった

第4話「住処と仕事をください」（後書き）

4話楽しんでいただけたでしょうか？

作者の視点としては笑を多く含んだつもりです

士助、仕事できてかっこいいっすね！

自分面倒くさがりなもんで・・・

とにかく最後まで読んでいただきありがとうございました

第5話「校開寸前の後悔」(前書き)

ども、キーダの滝っす

今回から2話ずつ投稿しようと思います

sonだけ

まあ本編をどうぞ

第5話「校開寸前の後悔」

あらずじ　学校へ行くことになった

「学校？」

「そ、学校へ行くのよ」

「んで、学校って何だ？」

あ、そこからですか？

「学校っていうのはだなあ・・・」

説明するのは前回後半セリフがなかったヒロトがでしゃばって説明
「うるさい！・・・んで、学校って言うのはだな・・・」

皆さんご存知だと思うのでカット

ヒロトにしや

べらせたく無いのも含め

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「フムフム、学校ってのは人間の一般常識を学ぶ、基礎知識を身につける、人間同士の関係を深める

そんな場所なんだな」

「カットしたのに丸々おまえが言うのかよ！」

「というわけで、そこに行くのよ、アンタ」

「おう、そこでどこにあるんだ」

「一緒に行くから気にしなくてもいいわ」

「いや、もう一つ問題があるはずです」

「頭が良いかどうかの問題は省くわよ」

「そこだよ！まさにソレが問題ですよ！」

「アンタ、頭良いの、士助」

「士助、55×2＝？」

「5555」

「アホね」

「アホですね」

本人はよく理解していない

「まあ、遅いかも知れないが必死に勉強しかもう方法がない気が・・」

「好きにして」

「ええ!？」

学校に連れて行くって言った本人が投げやりでいいの？

ヒロトは思う

「ぐっ!仕方ない・・士助勉強しておけよ!」

「おう!でおれは今から何をすればいいんだ?」

「ダメだこりゃ・・とにかく、誰かに勉強を教えてくださいと頼みにいけ!解ったな!」

「わかった!勉強教えてください、ヒロト!」

「俺は忙しいから無理、とにかく誰かみつけておけよ!」

「おう!・・・とは言っても誰かいるのかなあ?」

料理長の場合

「勉強教えてください!」

「ああ・・手伝ってあげたいんだが、私はあまり賢くないし手が空いてないんだ、すまないね」

使用人

「勉強教えてください!」

ところが、士助が仕事を済ましたため誰一人いない

「・・・・・」

加奈

「勉強教えてください」

「いや」

ダメもとでヒロト

「べんきょ」

「無理」

士助のメンタルメーターはすでに限界にちかかった

しかし、そんな士助にもチャンスがやってきた

「勉強教えてください！」

「いいですよ」

と優しく答えてくれたのは、休んで良いといわれているのにも関わらず出勤している「女之神　マリあ（めのかみ　まりあ）」であった。士助は5分間神に感謝した後、勉強とは何たるかを教えてもらった。しかし、戦う為に生まれた戦士‘玄龍族’、

戦いに考えるのは必要ない！と思っている種族
つまり・・・完全なアホであった

順調に始まったと思われたスタート

ハチマキもぎゅっ！つとしめやるぞ！と始まった

まず基礎からうんうん、算数、国語、社会、理科、英語、ドイツ語、フランスご、ふむふむ、え？ $2+2$ は4？

え？ 2×2 は4？おーおー、え、れきしってなに？ちよつとまってかんじ？なにそれ、いんせきがくるの？

あ、これはもつとききなの？

とこのようにわかっていただけただけでしょうか？

彼はアホです

強い、しかし、アホなんです

これで大丈夫なのだろうか・・・

ドアの隙間から見ていたヒロトは思った

「勉強なんかしなくてもいいのに・・・」

「！か、加奈お嬢様！いきなり、後ろから声を掛けしないでください！
というか、気配すらなかった・・・」

「アンタも思わない？」

「え？いや、勉強をしなければ入ることができないからそうは思いませんが・・・」

「アンタ・・・馬鹿なのね」

「んなっ！って馬鹿っていうのはどういうところが馬鹿なんですか！」

「ま、勉強なんかしなくても学校に入れるのにね」

加奈はそういつてその場を離れていった

（勉強しなくてもいい？ そんな事あったか？ 一体・・・）

ヒロトは暫く考えたあとハッ！ と言つてその後はまさか・・・まさかな・・・といつてヒロトもその場を離れた

そして、学校が始まる1日前・・・

士助はフラフラしながらヒロトと学校に来ていた

「フフフ…ついに、ついに、来た、なにより楽しみでないこの日がっ！」

「お、オイ・・・大丈夫か？」

ヒロトはフラフラしている士助の顔を覗き込みながら言った

「と、とにかく、今日のこの日が終われば全てが終わる！ ああ、長かったかなこの日まで・・・」

「いや、1週間しか経つてないぞ・・・」

そして、会場、に来たのは良かったが

「会場つてのがしまつてると思うのは俺だけ・・・？」

「俺もそう思うんだが」

そう、会場が閉まつていた

「オイオイオイオイ、どうすりゃいいんだ！ おれあ！ なあオイヒロトオ！」

「お、落ち着け限界が来ているのはわかるが落ち着いて・・・」

「落ち着いていられるかあ！」

「あんた達・・・やっぱり来てたのね」

後ろから声が聞こえ、振り向いてみると

「か、加奈お嬢様！」

声の正体は加奈であった

「ハア…ヒロト…ソイツに言わなかったの？」

ギクッ！ となったヒロトは

「や、やはりアレなんですか？」

アレ？ アレってなんだろう？ と士助は思い

「オイ、アレって言うのは、一体何なんだ！」

加奈はポケットから一枚の紙を取り出しヒロトに渡した
それを見てヒロトはやはりか…という顔をしてから読んだ

「合格届け 虹色士助様 貴方は試験において合格点に達したの
で本校

『一星千里学園（いちぼしせんりがくえん）に入学することを許可
します、だってさ…」

「一星千里学園…千里…千里ってどこかで聞いたような？」

「どこまで、馬鹿なんだ！千里って言うのは加奈お嬢様の苗字だぞ
！」

「え、でもなんで？」

「ハア…さすがにその状態じゃあ理解できないか…お嬢様のお父上
はこの学校の理事長で

お前が入学出来る様に加奈様が頼んでくださったのだ」

「じゃあ、加奈が言ってた勉強しなくていいっていうのは！」

「そうだ、薄々気づいていたがまさか本当だったとは…」

このとき士助は過去最高荒れていた

（千里…オジヨウサマ…？この学校…父上…頼んだ…入学…

今までの…ドリヨクは…ミズノアワ？ソナナ…ソナナ…）

…まあ、その後一日中、士助は部屋にこもりきっていた
な、何はともあれ明日から学校へ行く士助であった

第5話「校開寸前の後悔」(後書き)

えー、今回どうでしたか？

一日2話投稿なんで前書きも後書きも二つ目にまとめて書きたいと思います

じゃあ二つ目でまたおあいしましょう

第6話「ルール外のルール女」(前書き)

どもキーダの滝です(2回目)

最近話の題材とか考えるのに勉強してます

本業も大切ですが息抜きの感じで考えています

いい感じだと思います

では本編へどうぞ

第6話「ルール外のルール女」

4月初旬・・・

士助は学校に来ていた

先ほど始業式で紹介を受けしゃべった言葉は「眠い・・・」であった
そして、今は2－Bの教室前にいる 寝ながら

「zzzzzzzzzzzz・・・」

深い眠りにについている・・・ そして、教室内では・・・

「えー皆さん知ってのとうり今日から2－Bにやってくる
お友達を紹介します」

今しゃべっているのは2－B担任の「はなぬし華主 らんこ蘭子」

女の教師で、アダ名は「酒乱」

「えー、虹色士助君入って！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ？ちよつと待ってね」

といって廊下へ、するとしばらくもしないうちに

あ、ちよつと何寝てるの！羊が35万6392匹・・・

羊数えてる場合じゃないから！起きて！えー・・・なんすかあ・・・

そして

「ハアハア：というわけで転校生の虹色士助クンです・・・！ハア
ハア：」

そういつている先生の額には汗がにじんでいる

「えー…何言えばいいんすか？」

「君の趣味とか好きな物だとかやりたい事だとか！」

「ほおー、えーと、虹色士助っす、趣味は戦い、好きな物も戦い
やりたい事は全悪魔の抹殺です」

……………

教室が静かになったあと、士助は思った

（あれ？なんでこんな静かなの？俺わりい事言ったっけ？）

と思っていたとヒロトが自分の席から

『冗談でした、とかいって誤魔化せ！』

と書いたノートを見せてきた

「・・・・・・・・」

しばらく沈黙のあと

「冗談でした、てへ」

また、沈黙、そして

何だ冗談か！転校生の子面白いね！驚いたよ！悪魔とか訳わかんねえもんな！

教室がざわついた

あれで誤魔化すとは・・・・

改めて士助すげえ・・・・と思うヒロトであった

そして、休み時間

士助は人気者であった、転校生だから

何処にすんでたの？兄弟とかいるの？友達になろう！とかの質問が

押し寄せた

しかし、面倒くさがらずに士助は全ての質問に答えた

「住んでた場所は別の世界で兄弟は6人います。友達でいいよ」

しかし朝のことがあって、みんなは動ぜず

士助君って名前かわってるねー やっぱり冗談面白いな！

だとかの空気になっていた

それを見てヒロトは

クラスメイトのみんなすげえ・・・・と思った

だが、士助は2時間目の休み時間は教室におらず、廊下などを歩いていた

質問等がうつとうしくかんじたのだろう

ついでに校内探索の様な気で歩いていた

しばらく、歩いていると

「オイ、そこのお前とまれ！」

と声をかけられ、止まる士助
声の方を見てみると、ポニーテールで伸長は士助より少し低めの女
性がいた

「なんか、用か？」

「用か？だと？用なら大アリだ！」

と怒鳴られ士助は耳をふさぐ

「お前！その服は規定外の制服だ！今すぐ職員室に行って制服をも
らってすぐ

着替えろ！いいな！」

「うるせえな・・・制服ってなんだよ」

「お前：どこでも私を馬鹿にしおって・・・制服は制服だろうが！
お前は別世界の奴じゃあるまいしさっさと職員室に向かえ！」

「！お前：俺が異世界の住人だってわか」

「ちょっと待て士助え！」

と大急ぎでやってきたのはヒロトであった

「すまない有木さん！コイツには俺が言っておくから！」

「む！綾風、お前か：ならちゃんとしつけておけよ」

といって向こうに歩いていった

「なあヒロト、アイツ俺が異世界の住人だってことしっ」

「それは黙っておくんだ！いいな！解ったか！わかったな！」

と念には念をおすヒロト

「なあ、規定外の服って何だ？」

「お前の着ている服のことだよ：言っておくべきだったか：」

読者にはわからないが士助は最初からジャージを着ていた
落ちてきた時も、バケモノ切った時も、勉強していた時も
いつもジャージを着ていた

「というか、制服を今日の朝お前に渡さなかったか？」

「ああ、あれ動きにくいからやめた」

「やめたじゃねえよ！ハア：いいから制服借りて来い：」

「借りなくとも!」

と言って士助は何もないところから制服を取り出した

「!? え! え! お前何した!」

「持ってきた」

「いや、そうだけどさ!」

「まあ、異世界の人間ですから☆」

「…………ああそう」

そして…

「ああ、やっぱり動きずれえ。めんどくせ…」

「お前の言い分などどうでもいい、さあ、教室に戻るぞ」

「オウ!」

そして、昼休み

「士助、お前弁当はあるか?」

「何ソレ?」

「ハア…ちよつとカバンの中探るぞ」

いいよ、という返事のあと士助のカバンの中を探るヒロト

「ん、あるじゃないか」

と言ってヒロトは弁当箱を士助のカバンの中から取り出した

「! 飯のニオイがするぜ」

「お前の弁当だ! さあ、食うぞ」

「おお、ほんとに飯がある!」

「いただきます」

「ごちそうさま!」

「ええ!」

士助の弁当箱を見ると確かに空であった

「早ッ! そんなに腹減ってたのか?」

「んじゃそこらへんうろついてくるわ」

といって教室を飛び出していった

「あっオイ! ったく…なにもおこさないといいが…」

教室を飛び出した士助はとりあえず外にでた

「ん〜！今日は良い天気だ！」

ベンチの上で昼寝でもするか！といってベンチで昼寝というわけにはいかなかった

ベンチの上で横になった所までは良かったが目をつぶった瞬間

「オイ！お前そこをどけ！そこは私の席だ！」

（どっかできいた声だな…まあ寝るけど）

そして、寝るという瞬間に

「どけと言っているだろうが！」

の声が聞こえた時、士助は投げ飛ばされていた 声の主にいであつ！と言つて起き上がり声の主を確認すると

「あ、またお前か」

声の主は士助に対して注意をした女子生徒であつた

「お前とは何だ！それにどけといったらどけ！」

生徒はベンチに座ると弁当を開いた

（そういや、コイツの名前知らなかったな…）

「お前、なんていう名前なんだ？」

「何故知らない！？私は生徒会長だぞ！」

と言つて驚いた顔で士助を見つめていた

「しょーがねえよ、俺、偏狭性だから」

「転校生か…？なら知らないのも頷ける…」

私の名前は有木 ゆうき 藍 あいだ、覚えておけ」

藍は弁当を食べながら士助に言った

「藍だな、覚えてく」

士助は立ち上がつて制服をはらつた

「なっ！いきなり名前と呼ぶとはけしからん！ちゃんと苗字で言え！」

立ち上がり士助に怒鳴つた

「あーハイハイ、わかつたわかつた有木」

「なんだその態度は…まあいい」

彼女は座つてまた食べ始めた

（めんどくさそーなやつ…）

空を見上げながら思った

放課後…

「士助帰るぞ」

「おう」

廊下

「初めての学校はどうだった？」

「別に」

「そうか」

靴箱

「明日も来るようにしろよ」

「わーってるよ」

中庭

「明日からは授業があるぞ」

「ふん」

「お前…聞いているのか？」

「へーへーって、ん？」

その時士助は妙な物を見かけた

（トゲが何本もあって、小さい奴だったような？悪魔か？）

「おい、どうした」

「さき帰っといってくれ！」

士助は妙なものを追いかけた

「オイ！どこ行くんのだ！まあいいか…今日はアイツに振り回されて
ばっかだ」 苦労者のヒロトであった

士助は…

（どこ行った？小さかったからみつにくいかもしれないねえな…）

妙なものは森の中に逃げ込んだらしく士助はうろつきまわっていた
めんどくせえな…と思いながら探す士助
すると、声が聞こえた

「・リー・ちへ・い・」

（?どっからだ?どっからいってやがる?）

辺りを見回しながら奥へ進むと人影があった

（!誰だ!悪魔か?）

とおもつてのぞいてみると

そこにいたのは

「おお!ハリー!やっぱり今日も来たか!ほら、お前のご飯だぞ!」

有木 藍であった

なんでアイツがココに?とおもつて声を掛けてみた

「オイ:お前なにやってんだよ:」

すると、藍はびっくりしてわあ!と声を出して振り向き

「!ななななんでお前がココココにいる!」

「なんでって:妙な奴を見かけて追いかけてたらココに:」

「みよ、妙な奴?まさか、どこかにもう一人いるのか!?」

と言つてバタバタしながら辺りを見回す藍

「ん!ソイツだよ、ソイツ!お前の足元にいる奴」

「え?ハリーが?」

ハリーとはハリネズミであった。小さいのもトゲがたくさんもあて

はまる

「そう、ハリーが」

「ハリー見つかったのか!気をつけろといつも言っているじゃない

か!」

藍はハリーと話している

「なに、はなしてんだオマエ」

「!って別にコレはその動物じゃなくてだな!だから、規定に引っ

かかっているわけじゃなくて!なんだその!あの!え」と

う」という藍を見ながら士助は考えた

（ああ、そうか、そういうことか。コイツ、規定っていうのに引っ

かかっちゃいけないからこんな山奥でかってんだな。そういうこと

か）

士助は全部一人で解決した

「と、とにかく！皆には黙っておいてくれ！服は規定外の物もオマエは着て良いから！とにかく内密に！」

藍はあたふたしている

「別にいわねーけどよ…」

「本当か！助かる！非常に助かる！ハリーもお礼を言っているぞ！」

「ハリーどうも」

初日から大変な一日であった

第6話「ルール外のルール女」(後書き)

どうでしたか？今回新キャラが2人と一匹登場しましたね
一人目は華主 蘭子先生 普段は真面目で眼鏡かけてます
酒乱です

二人目は有木 藍 ちなみに生徒会長です 言わなくてもわかるかな？

弓道部です 結構出来る 好物は和菓子です
3匹目はハリネズミのハリーです

ハリーは藍のペットです 藍は動物好きです
学校のストレスを発散するためにハリーと遊んだりしています
ストレスっていうのは士助みたいな類です 以上キャラ紹介
次辺り説明して無い人とか説明しようと思います
最後まで読んでいただきありがとうございました

第7話「絶えなき耐え」

あらすじ

学校ってめんどくせえ

そんなことを思いながら土助はヒロトと廊下を歩いていた
今日は2日目 めんどくさい事にならないければいい
ぼーっとしていると肩がぶつかった

「痛っ！てめえ、どこ見てんだ！」

土助は天井を見ている

「オイ！無視してんじゃねえよ！」

「ん？なんか用か？」

「用か？じゃねえよ！てめえぶつかっただろ！」

「？何言ってるの？」

「ふざけてんじゃねえよ！お前が俺にぶつかったんだろが！」

これはマズイ・・・そう思ったヒロトは

「ああ…すまない、おれからコイツに言い聞かせておくよ」

「うん、頼むわヒロト」

「お前じゃない！」

このごに及んでボケる土助

「言い聞かせるじゃダメに決まってるだろ！土下座だ！土下座！」
(なんだコイツ…本当にこの学校の生徒か？)

「ホラ！土下座しろよ！」

「ハア…もういいや」

「ああ！？何がだ」

と言った次の瞬間、男は吹っ飛んでいた

あ、と思った時にはもう遅いなと感じたヒロト
そして、男は壁に当たって気絶した

……………

「って何してんだ！士助！」

「吹っ飛ばした」

「そうだけど！そうだけどさ！」

男は保健室に運ばれ結果ただの怪我程度だったらしい

「良かったな、気絶で」

「他人事じゃないから！お前のせいだから！」

「あー…ハイハイ」

「空返事…とにかくいいか！次、肩がぶつかっても喧嘩売らずに
謝れよ！おとなしく！」

「うんうんハイハイ」

「本当にわかったか…？」

「え？何が？」

「お前…ちよっと来い！」

その後、士助は1時間以上ヒロトに叱られた

その1時間後

「わかったか？」

「ハイ…わかりました…」

「ならいい。次から注意しろよ」

「ハイ…わかりました…」

こっぴどく叱られた士助

は魂が抜けていた

「ハア…なんでこんなに…」

そして肩がぶつかり、すぐ謝った

その次も、そして次も

「クソッ！なんで今日はこんなに」

さっきから、肩がぶつかりまくっていた

何故か不幸続きで士助はいつになくイライラしていた

士助のイライラフラストレーションは限界に達していた
あと一つ何か加えれば爆発しそうな爆弾のように
できれば何かあってほしくは無い

だが：現実には甘くなかった

「あ、キミハンカチ落としたよ」

(良かったこんなことでよかった)

「イテッ！何してんだお前！ちゃんと……っってお前朝の奴か

そう、士助は限界を超えた

「は？」

そういつて士助は胸倉をつかんでぶん投げた

「うおおおおお！」

「あ、あぶねえ！なにすんだ！お前！」

「次は手加減しねえ!!」

ひい！と言って逃げ出した。士助はそれを追いかける

「か、勘弁してくれえ！」

士助が攻撃を仕掛ける

←

男は避ける

←

士助の攻撃が校舎に当たる、壊れる
を続け校舎は壊滅状態にあった

そのため士助は1週間の自宅謹慎処分にあった
1週間士助は加奈に怒られた　そして反省：

1週間後：

士助は学校に戻ってきた

「やっとか：長かった」

しかし、何かが変だった

（何だ、何かがおかしい？）

その学校には異変の空気が漂っていた：

第8話「追っ手が追って、心を折って」(前書き)

ども、キーダの滝です

前書きでは加奈さんについて説明させていただきます

千里^{せんり} 加奈^{かな}

頭は良い、かなり 運動神経も人並みにある

学校編で出てきていないのは士助やヒロト達と同じ学校には通っていないからです

士助達の学校は平均より高いぐらいで加奈の所には及びません

動物は嫌い 小説とか好きです 推理物の

そんなぐらいかな…

それじゃ本編をどうぞ

第8話「追っ手が追って、心を折って」

あらすじ

いつもの学校とはなにかが違う？

なにかがというか人の気配を感じない

と思っていた士助の隣を犬が通った

「……動物禁止じゃなかったか？」

まあ、他にも違反者がいたという解釈ですませた

そう思っている士助の隣を今度はウサギが跳ねていった

まあ、違反者が二人……ってことで

次は亀

・・・・・

ほんとに何かがおかしい

校舎に入ってわかったこと

動物以外校内にはいない！

「どうなってんだか……」

校舎にはいるまでに

トラ、ヘビ、ネズミにネコ、さらにはゾウまでみた

どうなってんだか……と思う頃にはすでに遅い

すると、士助の前を動物ではない何かが通っていった

（！今のは……）

急いで追いかける士助

追いつき士助は再度確認しはつきりわかった

その黒いものの正体は下級悪魔‘アベアー’であった

説明 悪魔 アベアーについて

悪魔……士助の目的。悪魔を全て倒すためにやってきた。

ランク

下級…アベアー…小悪魔等

←

中級…デヴィル…人を模している。実力は普通

←

上級…デーモン…人を模している。デヴィルより強い

←

最上級…ディアボロ…最も強い。形はそれぞれ。

という感じになっている

アベアー…戦闘に至っては全く雑魚。人間にイタズラを仕掛ける程度

「どうやって捕まえるか、だな」

サルがとなりを通っていった

「捕まえる方法…」

羊と山羊が横切る

「クソッ！考えても浮かばねえ！とにかく、なんか探す！」

士助は校舎を走り回った

1時間後…

集まったもの

かご、バナナ、木の棒、紐

(思いつくものが…あれしかねえ…)

棒を紐で結ぶ↓かごの支柱にする↓下にバナナを置く↓完成☆

こんな罠にかかるバカはいねえ…

と言う矢先に

バナナ食っとる！！

今だ！と思って紐を引く

とかかった、あの罠に、単純な罠に

「……………」

士助は沈黙して

「あ、まあ、うん」

といってガッツポーズ

その後悪魔を消滅させ悪戯の魔法も解けた

「…簡単だった」

それ以上でもそれ以下でもなかった

「!今…」

その時、士助は何かを感じ取った

「強めの力…どこだ？」

同時刻のどこか…

「ククク…やはりアベアー程度にはてこずらないか…

まあいいどうせ私が出るつもりだったんだ。何も問題ない。

虹色士助…覚悟しろ！」

なにか違う異変がまた一つ…

第8話「追っ手が追って、心を折って」（後書き）

どうでしたか？次からはバトルに入って行きたいと思います
後書きではヒロトを

綾風 ヒロト（あやかぜ ひろと）

学力は上の下ぐらい（加奈は最上の最上）

執事能力は最高 加奈の近くにいることは完璧ならなければいけない
と思っています

完璧主義者 自分に妥協は許さない

日常のポジションはツツコミ 士助と加奈にはさまれているので
つつこむしかなくなる

動物は好き 苦手なものと言えば甘いもの

そんな感じ

それじゃまた今度

それと詳しいキャラ説明がほしければ作者へ
士助については説明しません

どうしてもという人は同様に作者へ
それではさようなら

第9話「1人对門&門番&多数のあいっら」

あらすじ

異様な力がどこかに感じた士助

（何だ：どこか、どこかココより遠い場所に大きな力が存在する）
その前兆か次の日2度目の悲劇が起きた：

その次の日：

士助は学校に来て最初にその存在を感じ取った

（！やっぱり：昨日よりか小さいけど悪魔の気配がある）

士助は教室に荷物を置いた後教室を出て行った

こっちか、こっちじゃないと言って校内を回る

そして見つけた 2階の校舎の突き当たりに

‘最下地獄門’（アンダーヘルゲート）を

最下地獄門とは：

別世界の物を転送するさいに使用する 対象は主に悪魔

転送定員数は50程度（アベアーを1としてデヴィルを10、デー

モンを30

ディアボロは転送不可）破壊可能 門付近には破壊しようとしたし

た者を排除

する門番が2体配置されている

「とにかく、ぶっ壊す！」

士助は拳を後ろに引いて思いっきりなぐった

ピシピシと音が鳴ったのと同時に門番が発動　大きなハルバードを
持った石像

が2体襲い掛かってきた！

しかし、士助は石像に動じず即座に剣を出し石像を切り裂いた

「てめえらにかまってる暇なんざねえってんだよ！」

改めて門の方を見ると門が開き始めていた！

「マズイ！これじゃあ…」

門の向こうには大きい力は感じ取れないつまりアベアー50体が出てくる

士助にとってたかがアベアー。50体だろうが100だろうが関係なく

全部倒せるが士助が思っていたものは

生徒を襲撃すること、それは非常にマズイ…

今回は冷静になりよく考えた

アベアーの実力は悪戯程度だがそれが何重にも重なれば悪戯の重複により

人体は限界を超える　つまり死

なので今、門を破壊しなければたくさんの犠牲者がでる

幸いこの場所は普段使われて無いので相手にとってもバレずに悪魔を放てる

士助にとっても大事にならないという好条件

なので自分の力を抑えず発揮できる　がこの世界に来て間もないので本気は出せない

がつぶすしかない！士助はそう思う

もう一度拳を引いて2度目の攻撃、そして3度目

この地点で門は半壊状態

「しぶとい…だったらこれでどうだ！」

4度目は強烈なキック、の時に悪魔が数匹でてきた

「！時間かけすぎたか！」

おそらく7匹ぐらい、倒す前にまず門を

士助は速攻で門を破壊したあと悪魔を追いかけた廊下を探しまわっていると上の階からうわぁ！という声が聞こえたので急いだ

すると、男子生徒がしりもちをついていた

「どうした！」

と聞くと生徒は

「さっき、なんか黒い奴が屋上に行って…なんなんだアレ！」

「ええっと…疲れてんじゃないかねえのか？まあ追いかけて確認してくるよ…」

という言い訳をしてから屋上に向かった

やはり屋上では一体悪魔がいた

悪魔を瞬殺してから士助は探しにいく

が、屋上のドアに手をかけた瞬間にグラウンドの方から悲鳴が

それを聞いて士助はグラウンドを見て女子生徒が悪魔2匹

に追いかけられていた

「めんどくせえ！」と言って屋上のフェンスに手を掛け

悪魔のいる方に飛んでいった

ドスン！という地面の音になり士助は足を押さえたあと

悪魔を瞬殺

そのようなことがその後4回続いた

1階の職員室前、次は3階の美術室、次に2階の図書室、また屋上というように士助はまた疲れた

そして、教室に戻り士助は3時間の遅刻

バッグはあって何故お前がない？という質問に人助けという答えを返したが

信じてもらえず4時間目の始まりから廊下にたたされた

被害は最小限に抑えたもののこんなことになるのは想像していなか

った

「うう…何で俺が…」

廊下でそんなことを呟いていると廊下の向こう側から

「玄龍の最年少兵器がそのザマとはな…」

「！誰だ！出てきやがれ！」

その声の正体は人間、がソレからは力を感じ取れた、それも大きい
紳士服を着た士助と同じくらいの正体は…

次回に続く

第10話「対デヴィル、アモン」(前書き)

ども、キーダの滝です

前の話見た人ならわかると思いますけど今回から戦います

それにしても1日2話投稿それなりに疲れる

でも見てくれる皆さんもために頑張ります

というわけで本編へごー

第10話「対デヴィル、アモン」

あらずじ

玄龍のことを知る人間？に会った。ソイツの正体は？

「てめえ…何もんだ！」

「ククク…知りたければ戦いを求めろ！どうせキサマも
てが空いているだろ、知ることが出来るぞ？血を求めれば。お前の
好きな血をな…」

その瞬間、士助は剣を取り出して切りかかっていた！

「そうだ！戦いだ…そうすることで俺もお前も乾きを潤せる…
さあ、戦おうじゃないか！」

（コイツの正体がわかんねえ以上、迂闊に口車に
乗せられるわけにはいかねえが…）

「いいぜ…暇つぶしでやってやるよ。お前の名は？」

「我が名はアモン。上級精霊のサタナキア様の配下だ！」

という相手は手の先にエネルギーを集約して剣のような物を
作り思い切り振った

予想外にリーチは長く士助の頬をかすった

「………」

士助は頬を押さえている

「どうした、その程度か？」

「御託はいいからかかって来いよ」

「フン…そういつてられるのも今のうちだ！」

そういつてアモンは連続攻撃で士助に少しづつ攻撃を当てていく
しかし、士助は攻撃を行わずただかわしているだけだ

（コイツ…何をたくらんでいるかわしらんがこのままでは死ぬぞ…）

?)

まあいいと思いアモンは一度攻撃を止め剣もしまった

「本気を出さぬならここで殺す!」

アモンはそう言って二刀流になった

「キサマはココで死ね!」

アモンは二刀流で激しく攻撃をしてさっきよりも士助に傷を負わせている

しかし、士助は相変わらずかわし続けている

「キサマ!さっきから攻撃をしないがそれで俺に勝てるとおもっているのか!

なめられたものだ:食らえ!クロススラッシュ!」

アモンは高速の速さで士助を切った

切った!という感触はなく何故かアモンの剣が二つとも折れていた

(!何故だ!確かに攻撃は当てた!切った感触は無かったとはいえ攻撃をした様子も見当たらない!一体:なにが)

士助の方を見ると士助は剣を持っていた

「いつの間に:」

「お前が切った瞬間だよ」

「!」

そう士助はアモンが攻撃を仕掛けた時に切っていた、感触も与えずに

「俺が今、持っているのは『デビルブレイド』。コイツは悪魔に効くらしい。」

知らなかったけど、試せて良かったぜ」

「ぐっ!俺は実験対象にだと:許さん:キサマは、キサマだけは!必ずここで殺す!」

そう言って武器もなしにアモンは士助に襲い掛かった!

士助は剣を構えてアモンが来た瞬間に

「お前なんかじゃ俺には勝てねえ」

士助は剣を強く握り、タイミングが合った瞬間!

「魔龍斬!!」

士助は剣を振り下ろしアモンに大打撃を与えていた！

「ば、バカなあ！この私…が・・あ」

アモンは砂のようにサラサラと消えた

「この程度かよ…」

そういう士助の顔からは余裕を感じ取れた

「それにしても廊下がボロボロだな…こりやまたおこられ」

その時、士助の体にこれ以上ない重さがかかった！

（ぐっ！なんつう力だ！いるだけでこの力…

おそらく、ディアボロ級！）

同時刻、グラウンドにて…

？「クキキキッ！結局アモンは死んだか！まあ、当然だな。捨て駒が1つ消えた所で微塵も痛くねえ！さあ、どうするかな…」

その悪魔は大きな翼で宙に浮き不適に笑っていた…

第10話「対デヴィル、アモン」（後書き）

えー、どうでしたか？

次はディアボロが登場します

ちなみに、ランクとかも悪魔の名前とかも勉強しました
疲れました、面白かったですけどね

さて、今回のバトル、自分の脳内では色々再生されてたんですが皆さんにとっては

小さかったでしょうか？

それと、廊下がズタズタになっただけですんだのはそうなるように士助が避けていたからです。だから、迂闊に攻撃しなかったんですね。

そんな感じ、それではまた次回
さよーなら

第11話「最高ランクの実力」

あらすじ

アモンを倒した士助。だが、もう一つ大きな力が…

「ぐっ！なんつう力だ…」

士助は大きな力によって体全体に負担がかけられていた

「どこだ…どこにいる！」

士助は力だけを頼りに探し回った

そして見つけた。グラウンドに。とても大きな力の発生源を…

「ん？なんだお前？」

「お前がこの力の発生源か…」

「お前どっかで見たな…そうか！お前虹色士助だな！クキキキッ！
そうか…お前があの危険因子か…」

「？何のことだ」

「キキキキキ！お前知らないのか？お前、多民族から危険因子って
扱いされてんだぜ！」

「！何故だ！なんで俺が…」

「当たり前だろ。ていうか、本当はお前もなんでかわかってんだろ
？」

「……………」

「そりゃあそうだろうな！人間界に顔出してりやそうなるわな。

あの玄龍因子殲滅作戦の生き残りだったらな」

「ぐっ…！」

「クキキキ！まあ、そんなことはどうでもいい…お前手負いだけど
暇だろ？」

だったらあそんでやるよ！このアスタロト・ポイズニー様がな！」

「言われなくても…」

士助は剣を出し襲い掛かった

「うらあああああ！」

「おっと。そらよ！」

アスタロトはひよいとかわし士助を蹴って地面にたたきつけた

「ケッ！こんなもんかよ…」

「まだ、終わってねーぞ！」

士助は立ち上がりもう一度攻撃を仕掛ける

「無意味に攻撃してな。俺はその程度のスピードじゃあたんねえ。」

「かわされそれが続く

「クソッ！クソッ！」

アスタロトは士助のどんな攻撃にも反撃せずただかわすだけであった

「だったら…！」

士助は剣を構えなおした

「何だ？何かやんのか？」

そして、士助はいつきに間合いを詰め

「魔龍斬…！」

切った！と思いアスタロトの方を見ると倒れて地面にふしていた

（何だ？何かがおかしいぞ…）

士助は切った感触があった

避けられたわけではない。だが、だが何かおかしい

そう考えてもう一度アスタロトの方を見てみた

すると、アスタロトが消えていた！

「！さっきまでそこに」

「誰が居たって？」

その声は後ろから聞こえた

そして、それは確認をせずともわかった

アスタロトであったと

「死んだと思ってたんだろ？んなわけ…」

アスタロトは手を士助にかざし

「ねーだろうが!!」

という手からかなり大きなレーザーを放った

「ぐあああああああああ!」

士助はレーザーに巻き込まれ吹き飛ばされた

レーザーが通った所は地面が削られ跡形もなくなっていた

その派手な音を聞いて校内の大半の生徒が集まっていた

ざわざわ…あれって士助じゃないのか? し、死んでるの? アイツは誰なんだ!

という声が聞こえてくる

アスタロトは士助の近くに立つと

「ククク…ギャラリーが集まってきたぜ…」

「グッ…」

「さあどうする? 死ぬか?」

「うるせえ…」

「ケッ! そう言ってもらえんのも今のうちだぜ。とはいえお前を殺すのは

勿体ねえな…」

アスタロトは少し考えた後

「そうだ、こういうのはどうだ?」

というアスタロトは生徒達の方に一瞬で移動し一人生徒を連れてきた

それは、ヒロトであった

アスタロトはヒロトを動けないように首を絞め

「コイツは人質って奴だ。死の二択だぜ。コイツかお前か」

「ぐっ…士助」

「! や、やめろ! そいつを殺すんなら俺を殺せ!」

「ククク…焦ってるな。まあ、落ち着けよ」

「何だと…！」

士助はアスタロトをにらみつけた

「クキキ！いい目じゃねえか。さてとそれじゃあ実験に入らせてもらうぜ」

「実験だと…？」

アスタロトはヒロトの腕をつかみヒロトの腕を折った

「ぐあああああああああああああ！！」

「！てめえ！何してんだ！」

「オイオイ、落ち着けて。コイツの骨が何本目でお前が暴走するかの実験だけだな」

ヒロトは苦痛にもがいている

「ぐっ…！うぐ！」

「やめろっていつてんのが聞こえねえのか！」

（クキキ…この様子じゃああと一本だな…）

アスタロトは今度はあばら骨を折った

このとき士助に怒りの臨界点をこえた

「グルル…てめえ…殺されてえのか…」

てめえは絶対に…絶対にゆるさねえ…！！」

すると士助から黒い霧が出て士助を包んだ

「来たか…」

アスタロトは冷静であった

その次の瞬間、士助が黒い霧を突き破って出てきた

「グルオオオオオオオオオオ！！」

出てきた物は牙があり、背中は棘で覆われうでや足は悪魔そのものであった

少なくとも士助ではなかった

「ヒヤハハハハ！その姿のお前と勝負したかったんだ！危険因子のDNAはやっぱりそうなってんだな…」

士助はその場で止まっている

「来ないんならこっちからいくぜ！」

アスタロトは爪を立てて襲い掛かった

「もらった！」

が、アスタロトは次の瞬間には吹っ飛ばされていた

そして、士助は一瞬で移動しアスタロトを殴りつけた

「がっ！！！」

士助は自我が無いのか校舎を攻撃した

「くきき…こりゃあ、様あねえぜ…とにかく、これ以上は危険だから帰らせてもらうぜ…」

アスタロトはその場を去っていった

しかし、士助は未だに暴れ続けている

「グルアアアアアアアアアアア！」

校舎はすでに半壊状態にまでなっていた

「士助…やめろ…」

ヒロトはすでに虫の息同然であった

士助は破壊対象の学校がなくなったので他のものを探している
すると、次の対象は、ヒロトであった

士助はヒロトの所に来て腕を振り上げた

「士助…やめろ…」

ヒロトの声は士助にはもう届かない

もう絶体絶命のその時！

？「もうやめとけ」

ひとりの青年が士助の腕をつかんでいた

士助は腕を振りはらうと青年に殴りかかった

だが、青年は冷静に士助を観察して

「ハラが…がら空きだぜっ！！！」

と言って士助の腹に強烈な蹴りをお見舞いした

士助は吹っ飛び、遠くの壁に叩きつけられた

「暴走してる場合かよ…」

士助は一瞬で移動、そして青年に飛びかかる

が青年は、士助の方に手を構え

「開け、ブラックホール」

というと士助の目の前にブラックホールが現れた！

士助はブラックホールの中に閉じ込められた

「暴走しやがって…」

その青年は静かに呟いた：

第12話「守らないと、強くならないと」(前書き)

ども、キーダの滝です

それにしても前話めっちゃ長いっすね：

バランスとるためにこの話は少なめにしようかな
それでは本編へどうぞ

第12話「守らないと、強くならないと」

あらすじ

暴走した士助を無傷でおさえた青年。彼の正体は…？

青年はヒロトを見て

「大丈夫か？一人であんなにたてるか？って無理か」

（何だコイツ…あの強そうな悪魔すら歯が立たなかったのに…）

「まあ、かつがせてもらうぜ」

よつと、と言ってヒロトをかついで歩き始めた

「お、おい。どこ行くんだよ！」

「どこって…お前の主人のどこだよ」

「何…だど？」

といったきりヒロトは寝てしまった

しばらくして目が覚めるとそこは、加奈の館だった

「あれ？俺はたしか…っていてて！」

ヒロトは骨折箇所を包帯で包まれていた

「そうか、俺悪魔にやられたからこうなってたんだったか…」

そう言っているとドアが開き

「ん！目が覚めたか」

「お前は…」

「まあ、長そうな話はゆっくりしなうぜ」

（そうだ、俺コイツに運ばれて、コイツは士助を…）

「って士助はどこに行ったんだ！」

「あんま騒ぐと体に触るぜ」

「そんなことは…ぐっ！」

ヒロトは痛む場所を押さえて苦しんでいる

「落ち着け。別に死んじゃあいねーよ」

「ぐ…本当か？」

「他人の心配する前に自分の心配しろつつうんだよ…」

青年はハアとため息をついたあと

「俺は虹色にじいろ 庵次あんじ。士助の兄だ」

「士助の兄…？」

ヒロトは不思議そうに考えていた

「？どうした、なんかあんのか？」

「あ、いや…別に」

青年は少し黙った後、

「士助を見てーか？」

訳のわからない質問をした

「どういう意味だ…」

「いいから、見てーかどうかだけ言え」

「見たいなんて言い方するな！アイツは物じゃない！」

「おーおー、怖いね。だけど今んもアイツは物って言った方がいいと思うぜ」

「なっ！お前はアイツの兄じゃないのか！」

「兄弟なんて名前だけだ…何も知らねーのに偉そうに言ってるじゃねえよ」

「だけど！」

「とにかく、見ねえなら言っとくけど士助は別にどうって事ねえよ。しいて言うなら大きめの怪我みてーなもんだ」

「！本当か！それはよかった…」

「自分のことはどうでもいいのか…」

「なにより、友の心配を優先したただけだ」

「友達ねえ…あ、それと大変な話だ」

「大変？何が大変なんだ？」

「この世界がもうじき悪魔の攻撃を受けるってこと」

「・・・・・・は？」

その場を凍てつかせる発言だった……

第12話「守らないと、強くならないと」(後書き)

また、キーダの滝です

夜遅くに作業して疲労がたまります

本業もだし、作業あるし：忙しいです

でも、頑張ります

それじゃあ、また次回

サヨウナラ

第13話「しばらく帰るわ」

あらすじ

ディアボロ級にやられ暴走した士助。今は安心らしいが…？

「悪魔が…この世界へ…！」

「ああ、そうだったらこっちはずぶれるな」

そう言うのと庵次はケラケラと笑っていた

「なっ！この世界はどうでもいいのか！」

「ああ。どーでもいいぜ」

「なっ！」

確かに、その口調はどうでもいい言い方であった

「じゃ、じゃあ、どうすればいいんだよ！」

「なにもせずに滅びるのを待つ」

「それ以外には…なにか…」

「それ以外だったら、無いことはねえな」

「！本当か！」

「士助を一度こっちの世界に持ってきて強くする」

「それなら、そうすれば！」

「欠点があるけどな」

「欠点？」

「それは、士助が耐えられるかどうか」

「！そんなにも厳しい物なのか…？」

その時ドアが、ガチャと開いた

「は、入るぞ…」

「ん！」

「士助！お前大丈夫なのか？」

「え、ああ：別に。昔っからすぐ怪我は治るからな」

「？どうした、何かあったのか？」

「いや：何も」

しかし、その士助はなにかおかしかった

「オイ。無視してんじゃねえぞ」

「げ：兄ちゃん：やっぱいたのか」

「いたっつーの。とにかく決めたか？」

「ああ：そりゃあ：」

「結局どうすんだ？」

「一度、里に戻るよ：」

「い、いいのか士助！お前、とても厳しいものなんだろう？」

「いや、今までにもそんなあったから余裕だろ」

「そんな軽くていいのか：」

「あ！それと言ってなかったけど来る奴らについて説明しとくわ」

「来る奴らって何？」

「お前にはまだ言ってなかったけど悪魔が来て

この世界つぶす、そんだけ」

「へえ：」

（なんで、そんなにも反応が薄いんだ：）

ヒロトはもうついていけないと思った

「んで、来る奴らの説明、をナレーションの人にやってもらおうわ

最近そういうの多いらしいから。んじょお願いしまーす」

「・・・・・・」

では、庵次さんに代わって私ナレーションが：

この世界やってくるのは「SBC (Seven Big Crimes)」

セブンビッグクライムスとは：

デーモン級7体で構成された組織

一人一人に大罪の称号が与えられている

部下にデヴィル1体とアベアー30体を持つことを許されている

「という訳だ。それで7日後に来るそんな感じだ。んじゃ行くぞ」
庵次はすでに異世界へ行くためのゲートを

「ええ！ああもう…行くよ…」

「気をつけろよ、士助」

「お前に心配される程じゃねえっての、んじゃあなヒロト！」

「ああ…」

士助はゲートをくぐり消えてしまった

「フフ…頑張れよ士助」

微笑むヒロトであった…

第14話「そんなわけありません」(前書き)

ども、キーダの滝です

めっちゃ遅れた…

やっぱ、きついかもしれないっすね

2話投稿出来なかった時はキーダの滝も疲れてるんだな、という暖かい目

で見守ってあげてください

心はハムスターなの

そういうわけで本編へれつつごー

第14話「そんなわけありません」

士助が故郷に戻って間もなく…

ヒロトの怪我は何故かすぐ治った

庵次がくれた薬を飲むとたちまち骨折も治り体の疲労も治った
さすがは玄龍族、といったところだ
話は日常へと戻る…

館にて

「ふあゝあ…今日は何曜日かしら？」

加奈は起きたばかりで髪はボサボサだ
布団の中から顔を出して時計を見る

時刻は今、AM7…36　そして、土曜日だった

「二度寝しよう…」

加奈はもう一度布団にもぐった

zzz…

「ふあゝあ…さてと今は…」

時間はすでに昼を過ぎていた

「寝すぎたわね…」

布団から出て、服を着替える

そして、洗面所へ行き顔を洗い歯を磨く、そして、髪を整え
少し遅めの朝ごはん（もはや昼ごはん）を済ませ部屋に戻って次に
何をするか

それは加奈の1日の日常であった

「っていうか、士助は!？」

「何がよ」

「や、だって士助の修行編とか…」

「だってめっちゃくちやなくなるんだもん」

「でもたったの7日間ですよ？」

「あら、知らなかったの？こっちでの1日っていうのはあっちでいう100日よ」

「ええ!でもなんで…」

「だって士助この小説のプロログで…」

‘ついに1607歳の誕生日が来た!!’、って言ってたじゃないの」
「ていうか、そういう意味不明的発言は謹んでください!」

心の中で、そうだったのかと呟くヒロト

「とにかく、士助がいないんならやること無いわね」

「はあ…何かなさいますか？」

「とりあえず、暇だから遊ぶしかないわね」

「?何をなさるんですか？」

「遊ぶの」

「何ですか？」

「アンタで」

「へ？」

加奈が持っていたのは拷問器具に拘束具etc…

「さあ、始めましょう…」

「え、ちよちよちよと待ってください!お願いします!何するんですか!

聞いて!聞いて!お願いします、待って待って待ってギャアアア

「アア！！」

同時刻、冥界にて：

「全員揃ったか？」

「レヴィンとベルゼビュートがまだじゃねーの？」

「何をしているんだ、アイツは？」

「どーでもいいから、さっさと始めな！？」

「お前は焦りすぎだっつーの、アスモディウス」

「ハア！ベルフェゴール、あんた殺されたいの！」

「やんのか、クズ女！」

「やめろ。こんなところで戦う意味はない」

「サタナスのおかげで死なずにすんだわね」

「テメエもな、クズ」

「もういい。お互いに死にたいのか？」

「ぐっ：！」

「キキ！遅れたぜ、わりいな」

「遅かったな：ベルゼビュート」

「死体回収してたら遅くなってたんだよ」

「相変わらず、趣味の悪い奴だ：」

「何だと、ルシフェル！」

「事実だ」

「喧嘩などしてる場合じゃないと思うが？」

「いい加減にしろ：お前ら全員殺されたいのか…？」

「キ：キキ、恐ろしいな：喧嘩やめるか？」

「死にたくないからな…」

「レヴィンが遅れている。マーモン、場所がわかるか？」

「おそろく、この世界にはいないね」

「そうか、だったら会議を始める」

「今日の会議の内容は何だ？」

「昨日入った情報だがアスタロト様が怪我を負って帰ってきたらしい」

「！何！相手は誰だ！」

「虹色士助だ」

「でたでた！また、危険因子じゃん！」

「ソイツ、強いのか？」

「知らん。詳しい情報はまだだ」

「攻めるのをやめるのか？」

「それも検討中だ」

「キキ！ソイツの死体が欲しいねえ…」

「デーモンランクで勝てんの？」

「わからない。が、わかっていることなら1つある」

「何それ。聞きたーい」

「危険因子はもう1段階強くなるだろう」

「勝ち目はあるのか？」

「我等に敗北など認められない」

「つまり、勝ってことね」

「そうだ。だが、それではダメだ」

「キキキ！殺す、だろ？」

「そうだ。危険因子を抹殺するのだ」

「おもしろそうじゃん♪」

「殺せばいいのね…」

「弱くなければいいのだが」

「興味ないな…」

「キキ！おもんねえ奴だな、マーモン」

「以上だ。それ以外何も言うことはない。各自自分で行動するんだな」

「最初は私が行く」

「マーモンか。好きにしろ」

「殺しちゃってもいいのか？」

「フン…所詮キサマら程度が勝てる相手ではない…」

「あーあ、どっか行っちゃった」

「アイツは何企んでんのかしら」

「会議は終了だな。我等『SBC』！危険因子に恐怖と絶望を！」

悪魔達は死を与えるものとなる…

第14話「そんなわけありません」(後書き)

改めてども

いかがでしたか？

それにしても投稿時間遅っ！

これじゃ今日一つだけとあんま変らないな…

本当にスイマセン！

明日まで！明日までお待ちください！

変なノリでスイマセン

それじゃ、さようなら！

第15話「ヒロトの日常…」

あらすじ

ヒロトは加奈の遊び道具にされてしまった

チュンチュンと雀がさえずる朝：

ヒロトも加奈も朝早く起きあくびをしている

ヒロトは基本的に6…30頃に、加奈は7…00頃に起きる

ヒロトはいつも同じことをして、同じ時刻に出る

いつもと同じ通学路を歩き、同じ人に会ったりする

だが、今日はいつもと違った

何かが：

ヒロトの学園の時間割は下記のようになっている

H R

1、授業（50分） 休み時間5分

2、授業（50分） 休み時間5分

3、授業（50分） 休み時間5分

4、授業（50分） 休み時間5分

昼休み（70分）

5、授業（50分） 休み時間5分

6、授業（50分） 休み時間5分

掃除、H R

見てわかるように昼休みが異常に長い

その分授業間の休み時間が少ない、なので別に変らない

何故、こうなったかというと理事長の娘の提案である（つまり加奈）

というわけで一気に昼休み

ヒロトは昼食を食べ終わり、廊下を歩いている

「これから、どうしよう？得にすること無いしね…」

長いがすることがなければ困ってしまう、そんなこともある

「飲みものでもかうか…」

その足は自販機の方へ向かっていった

「さて、何を買うか」

そういつて財布を開けるとぴったり99円。不幸中の不幸である

「ぐ…1円足りないとは不覚…」

もう少し持ってきておけば良かった、などとぼやいていると

「この100円さっき拾ったんだ！でも、なんか変な紙と置いてあつてさ」

などという興味のある話が耳に入ってきた

「どんな紙だったんだよ？」

「それがさあ…」

その生徒達は自販機の方へ向かっていったので、気づかれないように後をつけるヒロト

「なんか、この金銭を自販機に入れようものなら爆発するであろう、っていう紙とおいてあつたんだよ」

「なんだそれ！オカルト？」

「さあ、呪いのコインとか！」

2人の生徒は笑っていた

このときヒロトは1つ思い出した

これに関係する話を

(ちよつとだ…ちよつと前に士助から聞いた奴か？)

そう少し前の休み時間のこと

ヒロトは士助から興味のある話を聞いていた

士助の世界には人間の世界の物を改造した物が多くあると

携帯に包丁だったり、洗濯機、自転車。日常的なものから非日常的なものまで

とにかく、多くの物が形を変えずに能力だけが変わって別世界に存在すると

その中でも、最も面白いと言って士助が話した

自動販売機に入れると爆発する100円玉があると

なんでも、これを使って人間を抹殺しようとした種族があったが異世界に害を加えるものを作ってはいけないと言って

士助の世界の法で裁かれたと

ヒロトはそれを思い出した

（マズイ…もし、アレがそうなら、本当にマズイ！あの生徒死ぬぞ！）

ヒロトは急いで走りその生徒の下に行き

「な、なあ！キミ、すまないけどそのコインを見せてくれないか？」

「な、何だよいきなり…」

「いいから！頼む！」

「別にいいけど…返せよ」

「！あ、ありがとう！」

ヒロトはその100円を貸してもらい確認した

なんでもその100円の後ろには抹殺という文字が彫ってあるらしいそして、裏を確認するとうっすらはげているが抹殺の文字があった

（ややややばい！本当にまずい！しかし、どうする！こんなこと直接説明

しても通じるわけがない！だって、これ自販機にいれると爆発するから（笑）

と言ってもわたす人間この世にいない！）

「なあ、もういいか？」

（！相手は痺れを切らしている！なんとか、時間稼ぎを、そして最善策を！）

「あ、もうちょっと見てていいかな？この装飾が気に入ってさ…」

「ええ！もういいだろ、返せよ」

（チッ！こうなったら…強硬手段という奴だ！）

ヒロトは生徒の方を向くと

「これは…意地でも頂く！」

と言って走って逃げた

「あ！おい、コラ待て！」

生徒もヒロトを追いかける

（あっクソ！やっぱり追いかけてきた！普通だが、普通だけど！）

そんなことを心の中で呟いていると前に生徒が！

「あ！ちよっと！どいてくれえ！」

もうこの勢いは止まらない！かわすしかない…！と思ったが

その生徒はヒロトの腕をつかむとおもいきりぶん投げた

「ええ！どういこうこ」

ヒロトの声は途切れドスン！という音が鳴り響いた

「お前！廊下を走るとは何事だ！」

その生徒は有木 藍であった

「うう…まさかこの人だったとは…」

ヒロトはさかさまの状態でがっかりしていた

そうしていると恨み持ちの生徒がきて

「あ！生徒会長！ソイツを捕まえてくれ！」

しかし、その生徒は走っている。つまり、

「キサマら…ただで済むと思うなよ！」

投げられる

その後2人は藍に叱られ原因である100円は没収された

奪った方も悪いが落ちていた物を拾わず自分の物にした方も悪いらしい

藍にいわせれば。

そして、時間は放課後…

「ハア…なんであんなものがこの世界に…異世界へ通じるゲートを

通って

誰か来てるって言う事なのか？」

ヒロトはかなりくたびれてその夜はぐっすり眠れたらしい
しかし、それを裏で残念に思うものも…

「なんだよつまんねーな。あれさえ、成功してりゃ人間は混乱して
たって

いうのによ！まあいい、次はどう出るかだな…ククク…」

その笑いは暗闇にて怪しく動く影のもの…

第16話「土助の修行を少し…」（前書き）

ども、キーダの滝です

本当に投稿時間遅いですね

自分を全力で殴りたいです

ドMは無視して本編へごお

※注！滝はドMではありません！どちらかというところ

第16話「士助の修行を少し…」

あらずじ

人間界では騒ぎを起こそうという魔の手が潜んでいる…？

ここは異世界

多くの種族が互いに協力し合って生きる世界

しかし、そんな種族とは別にどことも協力せずに生きる種族も存在する世界

戦争もあれば永遠に平和な場所もある。そんな世界…

ここは玄龍族が住んでいる玄龍の里

里はとても高い場所にあり1つの家と家の間に深い谷がある

そんなところに住めるのは玄龍族ぐらいである

奥には大きな住居があり、そこに里長が住んでいる

今回はその里の少年の話…

谷と谷の間を華麗に飛び越えていく人影

「よっ！ほっ！よっと！」

それは士助であった

「オーイ、士助！今日も修行か？」

「おう！頑張るんだ、俺は！」

「ハハ、気をつけろよ！」

「ありがとう、おっちゃん！」

「士助君！今日はどこへ行くんですか？」

「今日は庵次兄ちゃんと手合わせだ！」

「頑張ってください！」

「ああ、サンキュー！」

里では顔が知られている士助は気楽に里をうろつける
なぜなら皆同じ境遇だからだ
そういうわけで士助は庵次のもとへ向かう

庵次は平原の中心に座っていた

「ん？ やつと来たか。まちくたびれたぞ」

「アハハ…わりいわりい。ちょっと用意に時間がかかって」

「言い訳はそれか。どうせ寝坊だろ」

「う！ なんでわかるかなあ…」

「とにかく今日はただの喧嘩だ。手加減はしてやる。」

「どうせ、技はつかわねえだけだろ！ それのどこに手加減の要素が…」

「ごたくはいい…行くぞ！」

「よし！ 来い！」

士助はなにやら本気混じりで戦っているが、庵次は武器も使わず
士助を押している。庵次はそうとうの実力者らしい

2人は日が暮れるまで戦い続け結果的に庵次が軽傷で勝ち

士助はボロボロであった

「もう帰るぞ」

「ハアハア…もうちょい…手加減…しろ！」

「お前が弱いだけ。じゃあ、行くぞ」

庵次は士助の後ろ襟をつかんで引きずりながら帰った

「うう…ひきずるなあ…」

士助の声もむなしく響く…

里にて…

「ううゝつかれたあ…」

「情けない奴だ…」

「うっせえ！兄ちゃんはやいすぎだからそういうことがいえるんだよ！」

「うるさいから外にでてろ。客もきてるし…」

「客？誰だソレ？」

「いいから外に出てソイツと話して2時間後に戻って来い。以上だ！」

と言って士助は谷に放り投げられた

「うおう！外は谷だから！危ないから！死ぬから！」

間一髪地面をつかんで士助はよいしょ、といっちはいずりあがって客人がだれか確かめた

それは、お隣さんの女の子。名前はミカという

「ん？おお、ミカかひさしぶりだな」

「うん、大分ひさしぶりだね」

「いやあ、長い間人間界に行ってきましたからなあ」

「人間界はどうだった？」

「おもしろいところだったぜ！っていつでももう行かないわけではないけど」

「…また、行くんだ…」

何か残念そうな表情をするミカ

「おう！こんどはアス何とかに勝つ！」

「士助君は戦うことを楽しんでるの？」

「別に楽しいわけじゃないけど、負けたから悔しい！だから、リベンジして勝つ！それがしたいだけ」

士助は拳を握って力説した

「別に楽しくないんだったらもうやめようよ…」

「何でだよ！負けっぱなしは嫌なんだ。悔しいもんだぜ」

「じゃあ、それが終わったらもう戦うのをやめるの？」

「いいや、やめないけど。強い奴がいる限りその頂点に立つまでや

めん！」

「でも…」

なにか、言いたげな表情

「というか、何でミカは、俺に戦って欲しくないんだ？」

「だって、士助君が私に会うときはいつも、傷だらけなんだもん…
もうそんな士助君見たくないよ…」

ミカは泣きそうな顔になっている

「ミカ…」

士助はミカの手を握って

「わかった！俺は最強になってミカに心配されない程強くなって、
それで

ミカを守る！だから、今は戦う事を許してくれ！」

「士助君…」

「頼む！」

士助は両手を合わせ頼んでいる

「うん…絶対だよ？最強になって私を守ってね…？」

「オウ！任せろ！そのためには修行してセブンなんとかとアスなん
とか

を倒す！それで、全ての頂点に立つ！」

フフフ…とミカは笑っている

「お！流れ星だ！消える前に願い事願い事…」

2人は手をあわせ願いを念じた

「かなうといいね…」

「うん！俺は最強になれますようにって願った！ミカは？」

「私は秘密だよ！」

「ええー」

残念そうな顔をしてみせる士助

そして、時はたって出発の日…

「おうし！もっかい行ってくる！」

「ああ、きをつけろよ」

里の皆は見送る人たちがたくさんいた
その中にいたミカは土助のところまで来て

「土助君これ…」

ミカは土助にペンダントの様なものを渡した

「何だコレ？」

「お守りだよ…気をつけてね…」

「女から貰ったもんは大切にされた方がいいと思うぜ」

「うん、わかった！ありがとなミカ！じゃあ、行ってくる！」

土助はゲートに入って行ってしまった…

「良かったのか？アレ渡して」

「いいんです…土助君に渡すなら…」

そういうミカの顔は赤くなっていた

（土助の野郎…泣かしたら殺す…）

その日の空はどこよりも晴れ渡っていたという…

第16話「土助の修行を少し…」（後書き）

どうでしたか？

土助にはちゃんとした友達がいるんですヨ！

うらやましいっすね…

おっと、キャラ紹介に移りましょう

ミカ・エルシール

土助とは昔からの知り合い　よく2人であそんでいた

料理が得意　趣味は花の手入れ　土助を誰よりも尊敬している

そんな感じの女の子です

それじゃぐっばい

第17話「最初の相手」(前書き)

ども、キーダの滝です

突然ですが、明日から1日1話になると思います

本当に申し訳ありません！

この小説を楽しんでいる方(多分いないケド)どうぞお許しください！

理由は本業の方が忙しくなるので1話にさせてもらいました
誠に申し訳ない！どうぞお許しを！

ダメな作者の書いた小説へそれでは行ってくださいまし：

第17話「最初の相手」

あらずじ

時間は経って士助は人間界へと戻る…

「よつと！」

士助はゲートをくぐって、再び戻ってきた

「おお！上手く加奈ん家に來れたなー」

士助は辺りを見回し加奈の敷地内とわかった

「おーし、だれかいいるかなー」

館の方に向かって歩き出し、途中で使用人の人と会ったりペットと遊んだり

そうしている内に加奈の家に着いた

「おじゃましまーす」

入ると真っ先に入ったのは加奈であった

「あら、帰ってきたのね」

「ついさっきだけどな」

「ヒロトは今学校よ。もしかすると、最後かもしれない。」

「そんなことはないさ！悪魔は全員倒す！」

士助は腕を振り上げて、気合を示す

「呆れる程に元気なのね…」

「おう！頑張るぞー！」

「いいから、学校行って来なさい」

「はい」

加奈はハイハイと言って自分の部屋に戻って行った（ちなみに加奈はサボリ）

士助はそのまま学校へ向かう

学校に着くと、教室に入り何食わぬ顔で席に座る
全員が驚愕してる中、士助はヘラヘラしている

「士助！帰ってたのか！？」

ヒロトは立ち上がり、士助に問いかけた

一応学校では逃走していたという事になっていた
皆口々に、逃げたんじゃなかったの？なんで逃げた？現実逃避か本
能のどっち

で逃げたの？等と聞いてくる

その場は先生に静められ、休み時間：

質問攻めを全て回避、そして授業、その休み時間という過程でここ
に至った

「ううう、こんなにもめんどくさいもんか…」

「まあ、一週間も開ければこうなると思うが…」

士助はぐったりしていた

すると、向こうの角から来た生徒と肩がぶつかったが、士助は怒る
気がない

「あゝ悪い。立てるか？」

士助は手を差し出す

「ああ…大丈夫。1人で立てるよ」

そうか、というと生徒は走っていった

「なあヒロト」

「ん？どうした」

「あんな生徒いたっけ？」

「…さあ？」

生徒は廊下を走っていた…

昼休み

士助にとって久し振りの弁当、そしてリラックスタイムである
すぐさま、弁当を食い終わり、廊下を走って外へ

そして呼び止められる。もちろん、藍である

「オイ！お前廊下は走るんじゃないや…って虹色士助！何故いるんだ！
逃走したんじゃないのか？」

「なんでそうなるんだ…さっき帰ってきたんだよ」

「ああ、やはり組織に手を貸してたんだな」

（俺が休んでいた間にいったい何があった…）

頭を抱え込みながら考えていると、ふと頭に朝の生徒を思い出した
「そうだなあなあ、最近誰か新入生とか入ってきたりした？」

新入生？というふうんと言って

「一番新しいのでお前ぐらいだ…」

「え？本当に？」

「ああ」

じゃああれはいい…

その廊下でその生徒は話を聞いていた…

昼休みが終わって午後の授業に入ろうとしていた時

「ねえ、キミ…」

後ろから声をかけられ振り向く士助

そこにいたのは

「キミって虹色 士助クンだよね…」

不敵な笑みを浮かべるあの生徒

「ああ、そうだけど」

今から屋上で話さない？と言われ屋上に来た
その途中、士助はうっすら感ずいていた

「良い天気だね…」

生徒は空を見上げ言う

「こんな天気が悪魔が襲ってきたりしたらどうする？」

士助はこんな質問を問いかける

「悪魔？なにそれ、そんなもの存在しないよ」

士助はポケットから鏡を取り出し

「じゃあ、自分の顔を鏡で確かめてみな。立派な悪魔が写るぜ」
と言って生徒に放り投げた

生徒は受け取ると

「やだなあ。僕のこと悪魔だと思ってるの？そんなわけないじゃないか」

鏡をみると悪魔は写らず自分の顔が写りそして

《アクマ！アクマガチカクニイマス！キヲツケテ！》

「！これは…」

士助の方を見ると既にそこには居らず真上に刀を構えていた

「やっぱりか！」

生徒がかわし刀は地面に突き刺さる

「何をするんだよ！危ないじゃないか！」

士助は刀を地面から抜き取り

「その鏡は本来何も写らない。だけど悪魔がみるとそれを察知して自分で警報を鳴らし忠告。人間界の物を改造して作ったものの1つ。異世界じゃあ玄関によく置いてるよ」

生徒は士助をにらんだ後

「フフフ…いつから気づいた？」

「本当は最初っから怪しいと思ってたけど、屋上にくる途中に確信した。」

足音がしなかったからな。昔、兄ちゃんから聞いたんだよ。

悪魔は物を離す、天使は引き寄せるってな。階段に嫌われるなんて

「そうそう無いぜ」

「洞察力の鋭い奴だ：まあ、いい。最初からこのつもりだ。作戦は不意打ちのつもりだったが…」

生徒は指を鳴らすと形が変わっていき次第に悪魔になっていった口で言い表すなら少々猫背気味の背中には針がたくさん生えており爪は鋭くがっていた

「フフフ：うずく、うずくぞ：戦いたいと…」

「どうでもいいけど戦うんだろ？名前は？」

「我が名はグリドル・マーモン。七つの内の強欲をつかさどる：さて、強欲というんだ：殺したら死体を持って帰るぞ：組織に死体マニアがいるんでな！」

そう言って襲い掛かってきた！

スピードは士助が上、しかし、一撃のパワーはマーモンが勝っていた士助は一度距離をとり様子を見ることにした

「フフ：離れていては勝負に：ならんぞ！」

マーモンは背中をこちらに向けると背中にある針を飛ばしてきた！士助はすぐに反応出来ずいくらか受けてしまう

軽傷だがあんなものが無限に飛んでくると厄介どころの話ではない「くそ！避けてばかりじゃ始まんねえ：！」

士助は隙を探し避け続け

（！ここだ！）

その瞬間に相手の懐に潜り重いパンチをくらわした

マーモンはズサササ：という音と共に後ろに後ずさりし今度は士助に顔を全力で蹴られる

さすがに、吹っ飛び金網に叩きつけられる

「ガッ！さすがに強いな：だが、こちらには人質がいる…」

マーモンはグラウンドの方に手を向ける

グラウンドでは士助のクラスが体育の授業をやっているもちろんヒロトも

「さあ、どうする？アイツらが死ぬか、キサマが死ぬか…」

「一番良い方法があるぜ」

「何？」

士助は一瞬で消えてその場のどこにいるかわからなくなってしまったどこだ、どこだといって探しているマーモンの後ろから突然あらわれ強キックをくらわせ、次に腹にもう一度重いキックを

マーモンは腹を抱えこみ

「ぐっ！キサマ：奴らがどうなってもいいというのか…」

「お前が隙だらけだったんだ。一撃入れるのは当たり前だと思うぜ」

「くそ…」

マーモンは地面に倒れこんだ

「フン：この程度かよ…」

士助は屋上を出ようとしドアノブに手をかけた

その瞬間さっきまで倒れていたマーモンが突然起き上がり飛び掛ってきた

「隙ありい！」

攻撃があたる！しかし、士助は冷静で腕をつかみ金網に向かってぶん投げる

ガシャアン！という音が鳴り

「何故だ：何故キサマわかった…」

士助はマーモンの方を向くと

「人質をとった瞬間にわかったんだよ、コイツは卑怯者だって」

「くそっ…！」

マーモンは起き上がり針を打ってきた

それもさっきよりも多く、速い物を

「これで死ね！」

マーモンの針によって士助のところは煙が舞い上がった

排煙立ち昇り士助の生死は未だ不明

マーモンはぜえぜえ…と息を立て今度は手からレーザーを打とうと
していた

煙が消えるとそこにいたのは士助と上着であった

マーモンはそれを見るとフツ…と笑うと上着を拾い上げ、士助に手を伸ばした瞬間

上着は姿を変え士助になった

そして、刀で切りつけた。わずかな時間の間で勝負はついた

「ぐっ！…ガハッ！いたい…どう…いうこと…だ」

「簡単な話だ。俺は上着に化けて上着は俺になった、そんだけだ」
チン、と刀をしまって消すと士助はマーモンに近づいた

「どうやって…服に…」

「変化だ、最近兄弟から教えてもらったただけだ。勿論、デメリットもあるが」

士助の言った通り化けていたということだ。

マーモンの攻撃の中で準備を行っていた

士助はマーモンの攻撃をある程度打ち落とすとあとの攻撃は煙を起こす

為に打ち落とさなかった

その中で士助は上着を自分に変化させ、自分は上着にということだ
あとはマーモンが近づくのを待ただけだったが拾い上げるというこ
とが起きたため近くで強力な一撃を叩き込むことが出来た、という
わけだ

「変化の弱点は力はそのまま残ること、お前が慎重な性格で力の探
査を行ってたら…」

「勝っていた…か？」

「別に。その時は別の方法があったからこれが失敗してたらそれを
してたかもな」

「ぐ…本気の一部も出していない…ということか」
マーモンはどんだん息が途絶えていた

「俺は優しくないからお前を殺しておくぞ」

「フン…好きにしろ…後にキサマもこっちに来る…」
「意味わかんねえこといってんじねえよ」

ドスッ！

マーモンは息絶えて土助はその場を去って行った

その少し後…

マーモンの死体を処理するのを忘れ急いで戻ると死体は跡形もなかったという

‘グリドル・マーモン’

そう書かれた棺桶を倉庫に置くものが一人…

「クキキ！まず1人か…次はだれが死ぬんだ…」

クキキキ…

その笑いは悪魔の笑い…

第17話「最初の相手」(後書き)

どうでしたか？

1話になる代わりに内容を多く、そうさせて頂きます
なんどでも謝りしつこいようですが申し訳アリマセン！
普通に戻ったらまた2話に戻らせて頂きます

最後まで読んでいただき誠にありがとうございました

第18話「次の悪魔は…」（前書き）

ついに、復活

どうも復活のキーダの滝デス

本当にご迷惑をおかけしました、申し訳ございません
今後のことに関するかもしれないので言っておきます

俺、学生です、しかも中3、受験シーズンまっしぐら

何してんだオマエ、というツツコミを一斉に浴びせてくれ
それはさておき18話ご賞味あれ

第18話「次の悪魔は…」

あらすじ

悪魔「グリドル・マーモン」に勝利
次の相手は…

いつもの朝

いつものベッド

そこで少年は爆睡していた…

「ZZZZZZZ…」

そこへドアをガチャリと開け、入ってきたのは

「いつまで寝てるんだ、お前は…」

ヒロトだった

すでに制服に着替え朝食も済ませ肩にバッグを提げている

「ん…なんだよ…」

のそのそと布団の隙間からこちらを覗いて目をこすっている

「いいから起きろ！」

布団をバサツと土助から奪い取ると土助はゆっくり起き上がり

「ふあゝあゝなんだよ…」

「なんだよ、じゃない！いつまで寝てるんだお前は…」

ヒロトは呆れ顔ではあゝと言っている

「zzzzzzzz…」

「って寝るな！」

今日も平和…

が油断はできない
学校ならなおさら

この前の事はバレてないが次で大騒ぎにならない為に士助も朝と違
って

目を光らせている
その隣にヒロトを連れて

「なあ、今日変な奴居なかったか？」

「は？まあ、居ないといえば居なかったような」

「そうか…」

士助は思う

昨日来た奴があゝの程度なんだ、次も言うほどでもねーだろ、
と言っても油断なんとかって言葉があるんだ、油断なんとかだな
そんなことを思いながら歩いていると
いつの間にかヒロトが先に行っていた
はやく来い、と言われ駆け足で向かう

時間はさかのぼってココは亜空間
移動する際に通る何でも無い場所
そこに黒い影が一つ

それはSBCの「エンブ・レヴィン」
何故ココに居るか
それは彼自身にも不明であった

「クソッ！ここも違う！おそらく会議には遅れているがなんとか脱
出を…」

その時刻はちょうどSBC会議が開かれた時刻
なんとか脱出しなければ永遠にさまようことになる

「こうなったら時空に壁を開けてでも…」

強行手段に出ようとした瞬間

「こっから出たいのか？」
「！誰だ！」

そこに居たのは虹色士助の兄、もとい庵次であった

「キサマ！何者だ！」

庵次はゆっくり近づいて来て

「こっから出たいんだろ？」

「その前に名を名乗れ！」

レヴィンは銃をこちらに向けている

「そんな警戒すんなよ。こっちは手を貸してやろうかって言うってんだぜ？」

「名を名乗らぬつもりか…なら交渉決裂だ！」

レヴィンは銃を撃ってきた
それをかわし庵次は気づく

「その銃…魔銃だな？」

「フツ…よくわかったな」

「まあ、よくしらねーけどな」

魔銃…所有者の能力に比例して弾の威力、スピード等が変わる銃

リロード不必要、弾にはホーミング機能付き、使いやすさに
特化

レヴィンは撃ち続け庵次に近づいていく

庵次は近づいてくるレヴィンから距離を離しつつ、弾を避ける
ホーミング機能がついているとはいえある程度離れていれば普通の
弾と同じ

になる、それを知っていた庵次は距離をとり続けている

このままでは長引いてしまう…

早急に戦いを済ませたいレヴィンは銃を一旦しまつて、スピードをだして

庵次に一気に近づく

距離がある程度までくると

「喰らえ…魔掌！」

黒いオーラを纏った拳を放ちそれをモロに喰らう庵次

吹っ飛ばされて姿勢を取り戻したもののその威力は絶大であつた

「それが魔掌…か」

「そうだ悪魔のデーモン以上が使える体技だ。たかがデヴィルと一緒にしてもらつても困るな」

黒いオーラは未だにレヴィンの拳にまとわりついている

「それにしても、よく耐えたな。常人なら即死だぞ」

「コレが…か？」

庵次は姿勢を戻すと片手を相手に向ける

「なんだ？レーザーでも撃とうというのか？」

「レーザーなんて優しいもんじゃあねえよ…」

庵次は手に力を込めると手に黒いものが纏つたそれはまるで…

「！魔掌だど！？」

「どうした？ 急におびえちまって…怖いかな？」

庵次は平静を保ちまだ片手を構えている
その拳はいつ放たれるか解らない
それまでにレヴィンは考える

（魔掌！？ 解らない、解らないが魔掌の威力は絶大だ！ あれを喰らえばひとたまりもない、かわすの1択かな？ いやかわせなかったらどうする？ 死ぬのか？

死にたくは無いが、それ以外に方法は…逃げる？ そんなことをすれば後ろから

モロに魔掌を喰らってしまう、だったら…）

レヴィンは考えるのを終えてレヴィンも片手にオーラを纏わせ始める

「どうしたんだ？ 逃げねえのか？」

「逃げはしないが、良い方法を思いついた。オマエの魔掌に俺の魔掌を

ぶつけてゼロにする！」

「俺の魔掌とオマエのが同等？ 笑わせんなよ…」

「安心しろ。俺はSBCでも魔掌の威力は1，2を争うほどだ、2撃目をすぐに叩き込んであの世行きだ…」

二人はオーラを纏わせ続け、ここだ！ という瞬間に相手の拳にぶつ
けた

ギリギリ…という音を立てながらぶつけている

「やるじゃねえかよ…だったらしょうがねえ…」

庵次はそう言うのと手のオーラが増した

それも2倍、3倍、それ以上に

（なっ！コイツは悪魔でもないのにどこにそんな力が！）

その瞬間拳ははじかれ庵次の一撃がレヴィンに炸裂

「あの世で元気でな…」

恐ろしい笑みを見た次の瞬間には強烈な一撃が待っていた

「深、魔掌、！！」

レヴィンは吹き飛んで気づけば死んでいた

「残念だったな…オマエでその程度ならSBCも大したことねえな…
せめてココで永遠に死にながらさ迷いな…」

庵次は闇に消えていった

そして、そこに時間差でもう一人…

「クキキキッ！レヴィンの死体は貰った…次は…マーモン辺りだな
…」
ソイツが不敵に笑った時刻、会議終了の時刻

第18話「次の悪魔は…」（後書き）

18話いかがでしたか？

今回は庵次が大活躍でしたね

ちなみに深‘魔掌’は庵次が使ったからです
威力も増しで

庵次はメチャ強いです

それはさておき受験が待ってるぜ

更新できなくなったら活動報告の方を確認してください
と言うわけでサヨウナラ

第19話「2対1」(前書き)

ども、キーダの滝です

前の話見やすくなりましたかね？

できればアドバイスを下さい

前のは友達に読みにくい、氏ね

といわれ改善しました

読みやすさを追求したい作者の話へれつつごう

第19話「2対1」

あらすじ

士助にとって平和な一日であった

魔界にて…

「ハア：結局死んだわね、マーモン」

「なんだ？悲しいのか？」

「んなわけないでショ！アイツが死んでサイコー！」

「ケッ！頭のおかしい女だぜ…」

「なんか言った？」

「別に…」

女の方は「ラス・アスモディウス」

男は「スロス・ベルフェゴール」どちらもSBCの団員だ

「なあ、次はどっちが行く？」

「アンタが行きなよ、死に様を笑ってやるわ」

「じゃあそうするぜ、それで虹色土助を殺してお前も殺す」

「なんですってえ…！」

二人の会話はいつもこうである

お互いに殺すという言葉を使って会話する

「じゃあよ、二人で組んで殺そうぜ」

「何で？」

「土助には懸賞金がかけてられてるんだぜ、コレを利用しない手はない」
「いい」

「でも、二人で組んで勝てる勝率は？」

「無い。でも、二人でやれば…」

「勝てるかもってことね」

「ああ、だから組まないか？」

「良いわね、今回は採用してあげるわ」

魔界での出来事だった…

その頃士助は：

寝ていた、それもまた、まだ布団だ

$$\begin{bmatrix} Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ \vdots \end{bmatrix}$$

前と同じやり取りが行われたのでカット

「ふあゝあ」

大きなあくびをしながら廊下を歩くいつもの二人

（そういや、昨日は来なかったな…もしかして間を開けてくんのか？）

考え事をしていて肩がぶつかった
少し痛かった

放課後：

今日もなにも無いな：

帰り道そう思いながら歩いていると

ズウウウウウウウン：

重い音が響き渡って士助は力を感じた

「！これから近い！いや：近づいてきている？」

辺りが急に闇に包まれ気づけばそこに居た

そして、士助は初めて他の存在に気づく

それは

アスモディウスとベルフェゴールであった

「ケッ！何とか成功したな！」

「そうね、ここなら気づかれずに行動できるわね」
「？何がだ…」

二人は小さく笑い

「ここなら戦ってるってことに気づかれないってことだ」
「誰にだ？」

「あんたの兄、虹色庵次よ」
「兄ちゃんに？」

士助は理解してないが二人はココに来る途中サタナスからある話を聞いた

会議の同時刻、レヴィンが虹色庵次にやられた、と

二人は信じられなかった、レヴィンはSBCでも3番目に強いぐらい二人より強い、なのでもし士助襲撃途中に庵次に気づかれると確実に死ぬ

なので二人は考えた、庵次に気づかれず士助に仕掛ける方法を…それがこれであった

「この異空間なら庵次に気づかれずにオマエを殺せる！」
「さっさと殺すわよ…」

だが、士助にとっては好条件であった
だれにもバレずに戦える、それに全力をだせる

「よし…じゃあ、やろうぜ…」
「死ぬ準備は出来たか？」
「地獄で二人にヨロシク言っというてね…」

しばらく止まってその次の瞬間に戦いが始まった！

「さっさと殺す！」

アスモディウスは地面に何かをもぐりこませた
それは、髪、であった

「アタシの戦術は髪！自慢の髪よ…このキレイでツヤのある髪！
髪の硬度を自由自在に！髪の鋭さを刀に！アタシの思うままに変え
れる！」

すると地面から髪が突き出てきた
士助は難なくかわすがそこにベルフェゴールの魔銃弾があった。そ
れを直撃。

「ぐっ！」

「まず一発目！」

今度はベルフェゴールの銃弾が来た
それをかわす、とそこからアスモディウスの髪が。もう一度直撃。
一発目はかわせるものの、二発目は厳しい

「これ、以外に余裕かもね！」

「そうだな！さっさと切り上げようぜ！」

今度は同時攻撃、やはりかわせる

（まずいな…このまま続くとキリがない…）

どうする、と考えているうちに攻撃はどんどん激しくなっていく

「「さっさと死ね!!」」

ダイヤモンドの刀と大きな銃弾、両方が来てかわせるかどうか…
ズドオオオオオオオンと大きな音と煙

「死んだ？」

「多分死んでない…」

煙の中から出てきたのは士助だった

「ゲホッゲホッ…なんつう攻撃だよ…」

咳き込みながら士助は言う

「しぶといわね…」

「さっさと死ねば良いのに…」

そんなことを言っていると士助は刀を出して

「そろそろ真剣にやるよ」

「本気じゃなかったってか？」

「嘘じゃないの？」

士助は構えて静かに集中している

「？何すんだ、アイツ」

「さあ、とにかく今はチャンス。殺すわよ！」

士助が精神を研ぎ澄ましているなか、二人は先ほどと同じような攻撃
それが士助に直撃

「2回目：死んでると思う？」

「まだ、いきてんじゃねえの？ 玄龍だぜ？」

二人が話していると煙の中から何かが飛び出てベルフェゴールを突き飛ばした

その次はアスモディウスを。地面からソレを確認してみると虹色土助、

であつたが何かがちがう

龍の様な鱗に大きな翼、目つきもどこか違う

「なんだ、オマエ…」

「俺は…虹色土助だ！」

二人は驚いたような顔つきで土助を見ている

「この姿は、TYPE―龍、少し龍に近づいた姿だ」

「なにソレ…そんなの！」

「聞いたことない。それは当たり前だ、コレはつい最近おれが思いついたヤツ

だからな。」

「思いつきだと…」

「これは身体能力向上、攻撃力、防御力、スピードが全て上昇する。しかもリスク無しで。良い能力だろ」

「なんつう姿だよ…」

ベルフェゴールが立ち上がって銃を向けた時そこにはおらず、既に後ろに回っていた

「！なっ！」

「喰らえ！」

まず、強烈なパンチ。吹っ飛びその場所に高速移動、そして、蹴り上げて空中に飛ばす。そこに移動して強烈な叩き落とし。地面着地後に刀を突き刺す。

「ぐあっ…！」

「玄龍乱舞、虹色、！」

ベルフェゴールはしばらくして力尽きた

「次はオマエだ…」

「ヒイツ！」

アスモディウスは後ずさりしながら最善策を考える

そこに迫る土助

アスモディウスには土助が悪魔に見えた

そしてふと思いついたようにポケットから試験管を取り出す

「フ…フフ…アンタ、これが何かわかる？」

「なんだソレは」

「これは超危険薬品よ…！大気に触れてから30秒後にビッグバン並の大爆発を引き起こす薬品…これでアンタも道連れよ…！」

「………」

アスモディウスが試験管を開けようとした瞬間

「深、魔掌、！」

アスモディウスが一撃を喰らってそこに倒れこむ

そこに居たのは虹色庵次

宙に浮いていた薬品をつかみ士助にむかって

「よお。ソレ、使いこなせるようになったのか？」

「まあな」

士助は、‘TYPE一龍’を解いて庵次に尋ねた

「なんでここが解ったんだよ？」

「あんまり俺をなめるもんじゃあないぜ」

「意味わかんねえ…」

「スロス・ベルフェゴール」 「ラス・アスモディウス」

二つの棺桶にはそう書かれていた

「クキキキ！また二つ…」

「まだ、そんなことをやっているのか？」

後ろに居たのはラーズ・サタナスだった

「サタナスか…驚かすなよ」

「質問しよう。何故そんなことをしている？グラニ・ベルゼビュート」

死体を集めているのはグラニ・ベルゼビュート、SBC団員

「クキキ！簡単だ…これは実験の材料だから、と言っておこう」

「そうか…」

「次はアンタが出るのか？」

「次は、ルシフェルだ、残念だったな」

「何が残念だって？」

「…フン」

サタナスはどこかへ去った

「心の読み取りにくいヤツだ…」

その部屋にあった死体の数、5000程度
ベルゼビュートは何をたくらんでいる…？

第19話「2対1」 (後書き)

いかがでしたか？

今回は士助が大活躍です

明日も頑張ります

エールを下さい

最後までお読みいただき誠にありがとうございました

第20話「意外な訪問者」(前書き)

ども、waterfall of kida です
今日も更新遅くてすいません
明日は頑張って2話更新します
そして話へGO

第20話「意外な訪問者」

あらすじ

アスモディウスとベッルフエゴールを新たな力で倒した士助
次の相手は？

異次元空間にて…

「まあ、とにかくSBCはあと2体だ。気拔くなよ」
「わかってるよ。どうせ戦うし…」

異次元空間をとりあえず出て再び話を再会する

「倒せるなら良いけどな、あ、それと殿着トノツキが来るみたいだぜ」
「げ！殿着兄が！」

「どうした？何かあるのか？」

「いやあ…まあ…」

士助は顔を青くしてハハ…と笑った

その頃異世界の玄龍族の里にて…

「殿着よ、頼んだぞ…」

「あの…里長…」

「どうした？」

「殿着様は既にいません…」

「………」

そして、人間界…

館に見知らぬ男性が入り込んでいた

「ねえねえ！そのキミ！かなりカワイイね！俺と今からお茶でも…」

「何コイツ…うざ…」

「何だキサマ！加奈お嬢様に近づくな！」

加奈をナンパする男、それを振り払うヒロト
男性はヘッドフォンをして眼の色は黄色をしていてどこことなく士助に似ている

「何だあ、少年。俺は今、美少女とお茶がしたい気分なんだ。邪魔するんじゃ

無いぞ。」

「ええい！さっさと消えろ！」

「久し振りの登場なのにこんな奴に絡まれるなんて…」

男はニヤニヤしながら加奈に話しかけている
とそこへ

「ああ…疲れた…」

「！士助か！助けてくれ、今変態が来て…」

「ム！誰が変態だ！俺はただカワイイ女の子と遊びたいだけで…」

「あ…」

「ん？」

その時士助と男の目が合って

「おお！士助じゃないか！いやあ、探したよ！」

「ど、どちら様ですか？」

士助は目を逸らして声もできるだけ変えた、つもりだ

「何言ってるんだ！わかってるぞ」

「う…そうですよ、虹色士助ですよ…」

士助はハア、とため息をついて諦めて自分から明かした

「何でいるの…殿着兄ちゃん」

「届け物だってさ」

「届け物？」

殿着はバッグからお届け物を出した

その大きさはバッグ以上の大きさだったが

「ほい、コレ」

「！これって…」

お届け物というのは刀だった

「コレ…」

「お！解る？そうそうコレはアレだよ、アレ」

「おぼえてねーのか…コレは玄龍の秘宝だろ？」

「あ、そうソレ」

なんて適当な…心の中でヒロトと加奈は思う

「なんでコレを俺に？」

「なんか爺さんは頑張ってるからとか言ってた」

「ああ…そうすか…」

士助が嫌な理由というのがこの適当さである
本人も自覚するほどの適当さらしい

「まあ、わかったよ、頑張る」

「そんな感じで頼むわ」

「ハイハイ」

もう自然な感じでいっぱい

「それはそうとさ、久々に遊ばない？」

「ヤダ」

「じゃあいいや」

もうなにがなんやらの状態である

「それじゃあ帰るわ」

「うん、バイバイ」

「バイバーイ」

空間の中に殿着は消えていった
それを手を振りながら見送る士助だった

「なんで来たんだ、アイツ」

「きっと天性のアホだから気が合うのよ」

「どっちがですか？」

「両方」

「なるほど」

士助は貰った剣をブンブン降っている
それにどこか嬉しそうだった

「よし、頑張るぞ！」

ニコニコしながら士助は言った

魔界

「ハア…ハア…これでどうだ…」

目の前にはおそらくダイヤモンドの壁の目の前に悪魔は立っている
バチバチと音を立てて悪魔は両手にエネルギーを集中させている
そして、

「『デビルブレイド』!」

目の前にあったダイヤモンドの壁に向けて放つと壁は音を立て粉々に砕けた

「ククク…これでどうだ…」

「必死だな、ルシフェル」

「ん?なんだ、サタナスか…」

サタナスはルシフェルを見つめていた
その目はどこことなく冷たい

「なんだ? 虹色士助が怖いのか?」

「ククク…俺もオマエと同じ獣なのさ…」

「…そうか」

ルシフェルはその場を去っていった

「オマエもどうせ死ぬさ…友よ…」

サタナスはしばらくその場じっと立ち尽くしていた

第20話「意外な訪問者」(後書き)

ハイ、というわけでしたか？

今回多分短いですね

すいません

明日は働きますので

受験近くて少々焦り気味のキーダの滝の作品を優しい目で見守り
尚且つ最後までお読みいただき誠にありがとうございました

第21話「VSルシフェル1」(前書き)

キーダのアレです 滝です

朝から書いていて時間がねえ

どーでもいいからという人が多数と思うので
本編へ行けえ

第21話「VSルシフェル1」

あらずじ
殿着^{トツキ}の届け物を受け取ってまた一段と張りきった士助だった

殿着を見送って士助は自分の部屋で刀を磨いている
ヒロト達は部屋のドア付近で

「何なんだ、アイツの兄弟は…」

「戦うことしか知らないからよっぽどアホなのよ」

士助の兄弟について話し合っていた

今日は土曜日、士助もヒロトも休み（加奈はサボリ）
とてもゆっくり出来る日なので士助もどことなく嬉しそうであった

「やっぱりこの‘宝刀 龍牙’ 良い太刀筋だな…」

士助はせっせと刀を磨き

「加奈お嬢様、何かお食べになりましたか？」

ヒロトは加奈に仕えて働き

「五月蠅い」

加奈は罵倒する

こんなことはほぼ日常的に進められている
これが続くといい…そんな幻想こそ壊されやすいものだった

士助の部屋の前にメイドのマリアさんが来て

「士助さんは今部屋に？」

「ああ、居ますけど、なにかあったんですか？」

「さっきポストを見てきたら…」

そう言って手紙を出した

どうやら士助あてらしい、住所もなければ、郵便番号すらない
どこか異様な雰囲気の手紙だった

「ちょっと、さっきから五月蠅いぞ」

「あ、士助さん。これ士助さん宛てに…」

マリアは手紙を士助にわたして、士助は何々…と手紙を開けた
その中身は

『虹色士助へ

お前の館の前に午後6時に異次元空間を開く
ソレまでに館の庭にいろ

S B C プラド・ルシフェル』

決闘状、の類であった

「ふうん」

「士助、これって…」

二人は目を合わせ士助が頷く

「どんな奴かわかるのか？」

「全然」

「そうか…」

その後はいつもの様に時間を過ごした
士助を除いて：

そして午後6時：

士助は庭にいた
来客は待つように腕を組んで
そして、館の時計が6時になり、鐘が響く
すると、辺りは闇に包まれそこには

「やはりきたな、虹色士助」
「・・・・・・・・・・」

SBC 団員「プラド・ルシフェル」がいた

「この日を待っていた…」

「別に俺は待ってねーけどな」

「御託を抜かしてる暇などない。俺はお前を殺したい！」
「あっそ」

ルシフェルは戦闘体勢になり士助も渋々刀を構える
数秒静かな空気が流れ、その後

「行くぞ！」

というルシフェルの掛け声で戦いが始まった
士助VSルシフェル
自分のプライドを守るのはどちらか…

第21話「VSルシフェル1」(後書き)

みじかい

です

今回短いです

次は長くシマス
オタのしみにく

第22話「VSルシフェル2」(前書き)

この小説は

読みやすさを追求するキーダの滝

作者に面白いと言われたいキーダの滝

受験が辛いキーダの滝

が執筆します

第22話「VSルシフェル2」

「ハアアアアアア！」

ルシフェルは声を上げて襲いかかってきた！

「喰らえ！」

「おっと」

士助は難なくかわす、ルシフェルは手に集中させたエネルギーの剣で攻撃

二人は間合いを詰めて攻撃し合っている

お互いに武器は剣と剣、相手との距離を保ち続けている

「フン！やるじゃあないか！」

「そっちこそ！」

剣と剣がぶつかってギン！ギンッ！と音が鳴る
どちらも傷一つない

「長くなりそうだな…」

「じゃあ、どうする？」

「ならば…」

二人は距離をとったあと

「お互いの強力な技をぶつけて勝負しようじゃないか」
「いいなソレ」

二人はそのあと力を溜め始める…
そして、お互いに溜まると

「「うおおおおおおお！」」

相手に向かって走り出し、ココだ！という瞬間に

「デヴィル・ブレイド」

「魔龍斬！」

しばらくした後、士助は地面に倒れこみ伏せた
よく見ると剣も折れている

「クソ…」

「ハアハア…どうやらその装甲にも効いたみたいだな…」

士助は苦しんでいる

「ハア：なかなかやるじゃねえか：」

「それにしても：よく耐えたな：」

「玄龍族だから：な」

「皮膚の硬度はダイヤモンド以上だったか：？」

ルシフェルは息を整え、士助は姿勢を戻す

「へへ：どうすんだ：？」

「フン：さっさと決着をつけるのみだ：」

「さっきのはもうおしまいかな？」

そういつて士助は新たに刀、宝刀‘龍牙’をとりだす
そして、深呼吸をしたあと

「アレは一回だけなんだな」

「どうかな？もう一度撃てるかもしれないぞ？」

「ざっと2回だろ？」

「ほう、よくわかったな：」

ルシフェルも手にエネルギーを集中させ剣をつくる
もう一度、剣を交えるつもりで少しずつ近づく

「俺は2回しか今のを撃てない：覚えておくんだな」

「そうする：ぜっ！」

ギン！という音の後に再び剣撃が始まる
二人はお互いの攻撃をかわし、かする
そんな高度な勝負が行われる

「お前はどこまで悪魔を知っている？」

「全然！」

「なら、ちょうどいい！教えてやろう！」

そう言ってルシフェルは高速つで移動し士助の後ろへ移動しキックをくらわせる

「うおっ！」

地面に叩きつけられてて…と言って起き上がる

「今のは高速移動、我ら悪魔は、ジャンプと呼んでいる」

「速いな…」

「お前と一緒にしてもらっては困る！」

ルシフェルはジャンプをして士助の目の前に来て手に黒いオーラを集中させ

「魔掌！」

ズン！と思ひ音がなつて士助は吹っ飛ばされた

「い、つてえええええ！」

「どうやら魔掌は効くみたいだな…」

士助は立ち上がり

「つてて…しょうがねえ、俺も見せてやるぞ…」

体に力を溜める

そして

「TYPE一龍、!!」

大きく風が起こり、士助は姿を変えていた

「そろそろ力だしてくぜ…」

「その姿か…本当に強いんだろうな？」

「勿論だ！」

ジャンプよりも速いスピードで移動そして、

「!速い！」

「喰らえっ！」

魔掌よりも強い掌撃をくらわせる

ルシフェルはのけぞり、士助に魔掌で殴りかかろうとするとそこには既に居らず、後ろに回られていた

「もう一発喰らえ！」

「グフッ！」

1撃目のパンチを喰らうと士助は2撃目にキックを、3撃目に頭突き刀、頭突き、刀と喧嘩の様に出来るだけの攻撃を喰らわせる

ルシフェルはそれを喰らい続けてフラフラになり反撃する余地すらない

身体能力が全体的に上がっている士助は強烈な攻撃を喰らわせ続けるしかし、その状況下においてルシフェルは冷静に分析を行ったそして、ココだ!という瞬間に

「デヴィル・ブレイドオ！」

士助に一撃を叩きこみ重い一撃でひるんだ士助にこんどは俺の番だといわんばかりに攻撃を決める

しかし、士助の連撃のせいかもしれない長くは続かず途中で倒れこむ士助も攻撃を喰らい続けて倒れる
互いにハアハア…と肩で呼吸するぐらいに息があれている

「ハア…クソ…こんな…ところで…」

「こんな…ハア…奴に…」

二人は立ち上がり士助は刀を構え、ルシフェルはデヴィル・ブレイドの体勢に入る

「なんだよ…ハア…3発うてんのか…？」

「フン…撃てるわけも…ない…」

「だったらなんで？」

「どうせ死ぬ…だったらお前を道連れにと思ってな…」

士助もルシフェルも死にかけというのも嘘にならないぐらいにボロボロになっている
そして

（サタナスよ…お前はいつも最後に手を出すんだな…いつだって…）

「どうした？死ぬから走馬灯でもめぐってんのか？」

「フン…どうだっていい…」

「「ウオオオオオオオオオ！」」

駆け出して互いに剣と刀を振る

互いのプライドをかけた戦いに終止符が打たれる…

第22話「VSルシフェル2」（後書き）

おーたーのーしーみーいーたーだーけーまーしーたーかー？
鬱陶しくてすいません

今日も遅いな

本当に申し訳ありません！

いつも頑張ってるつもりですが受験が忙しくてデスね

エールをプリーズです

最後までreadしていただきvery thank です

第23話「決着」(前書き)

コレを書いている内は余裕
かけなくなったら：

第23話「決着」

ギィィン！という刀音

二人は既に相手を切っていた
だが、

ルシフェルは限界を超えた状態でデヴィル・ブレイドを放ったので
その技の質も落ちていた
なのでそれは

「フ…フフ…俺は死ぬのか…」

「無茶するからだな」

士助には通じずルシフェルには大打撃になっていた

「意外と強いんだな…」

「俺にも約束があるからな」

刀をしまい近づいていく士助

「お前にもなんかあったのか？」

「フン…俺はただ、血を求めただけだ…」

その場でルシフェルをただ士助は見つめていた
ただ…ただ…

「！何故だ…何故来ているんだ！」

ルシフェルは急に焦りを見せる
士助にはそのことはよくわからない、がそれもつかの間
しることになる

「無様だな、ルシフェル」

「サタナス…」

そう、知らぬ間に後ろで宙に立っていた者、サタナスがそこにはいた

「やはり負けたか…期待はしてないが…」

「クク…ベルゼビュートの死体回収か？」

「それと、お前のトドメだ」

サタナスは魔銃を取り出して銃口をルシフェルに向ける

ルシフェルは逃げる事が出来ない、なのでその場で目を閉じた

「お前に殺されるんなら…本望かもしれんな…」

「どうでもいい。さっさと死ね」

サタナスが引き金を引くとその威力はもはやレーザー同然、士助も慌てて

回避する

もはやホーミング機能すら失われた銃弾だがそれに相応した物が放たれた

地面ははっきりしてないもののあれば地は削られているであろう

「死体を吹き飛ばした…？」

「フン…」

サタナスは振り返って帰ろうとしていた
それを見て士助が

「オイ！死体回収とかするんじゃないのか！」

「……………」

「オイ！」

サタナスは異空間の穴を開けると

「アイツの死体を譲るつもりは無い」

と言って空間の穴に入って消えた

それを士助はただ見ていた、その後刀を見て

「俺は強くなったのかな…父さん」

異次元空間を出るとそこには加奈とヒロトがいた
士助の姿を見て心配する訳ではなく、勝ったんだなと目で理解して
くれた

加奈は傷口をいじっていたが

魔界：

会議室、そこにはベルゼビュートとサタナスがいた

「クキキ！次はアンタか！さっさとアンタの死体を貰いたいね！」

「俺がアイツに負けるとでも？」

「逆に勝算はあるのか？」

二人はにらみあっている

そこに、

「サタナスさま、魔王様がお呼びです」

とSBCの部下が入って来た

「わかった、すぐ行こう」

サタナスは席を立ち魔王の元に行こうとしたときベルゼビュートに呼び止められて

「魔王様からのお叱りなんじゃあねーの？」

「何故そう思う？」

「弟を殺したから、とか？」

しばらく黙っていたが

「魔王様はそんな方だとでも？」

「クキキキキ！知った口だな…さっさと行けよ！魔王様がお待ちだぜ」

「…フン」

サタナスは足を進めていった

魔王の部屋のドアを開けるとそこに居たのは

「やっと来たのか」

大公爵「アスタロト・ポイズニー」と

「遅かったな…」

姿ははっきり認識できぬが後ろ向きで椅子に座っている
皇帝「ルシファー・セイブス」がいた

「どうした？ なにかあったのか？」

「いえ、ただ遅れただけです。申し訳ありません」

サタナスは魔王に対して敬意をはらった言葉で話す

「なんで、呼び出したんだ？ ルシファー」

「お前には関係ないだろう、アスタロト」

アスタロトは軽い口調で話す。が士助から負った傷口がまだ残っている

「今度はお前が虹色士助と戦うらしいな…期待しているぞ…」

「ありがたき幸せ…」

サタナスはひざまずいて礼を言う、その後

「それと、ルシフェルの件ですが…」

「死んだんだろう？ 知っているがどうかしたか？」

「なにか気にかけることは…」

サタナスがルシファーを見ると、ルシファーは

「どうでもいいな、あんな出来の悪い弟は…」

「左様でございますか…」

そこにアスタロトが口を挟む様に

「アイツに勝ったらお前は俺以上で交代だな」

「滅相もない…」

「どこまでも腑に落ちない奴だな」

サタナスは考えていた、この状況を打破する方法を。

その場にいるサタナスは見えない気配、つまり殺気を感じ取っていた二人のディアブロから感じ取れる殺気、それも強大な…

「何か言い訳はないのか、アスタロト」

「負けた時のか？ そうだな…」

アスタロトはそうだな…と言って考える

「なんなら体がなれてなかったとかだな…」

「ココは自由に動きが取れないからな…例えば…」

サタナスの瞬き一つの時に二人はジャンプ、そして、

「こんな風にここの三十倍の重力に負けて動けなくなるサタナスの様にか」

アスタロトは魔銃を、ルシファーは手に集中させたエネルギーを首に当てていた

ルシファーの姿を確認したいものの体が言うことをきかない、サタ

ナスは

「一体どういうつもりで…?」

その場でじつとしながら質問をするサタナス、その返答は

「フフフ…気にするものでもない、ただの暇つぶしだ…それと」

ルシファーは王座に戻り

「負けて帰ってくるとこうなるという脅しだ」

アスタロトも戻ると、サタナスは鈍い体に戻して姿勢を戻す

「十分に理解しました…」

「…わかればいいんだ、もう下がっていいぞ…」

「ハイ…」

サタナスはドアの向こうへ去っていった

「脅して良かったのか?」

「アイツは臆病者だからな…」

ルシファーは小さく笑った

サタナスは会議室に戻ると、席に座り

「クキキキ！どうだった？魔王様とお喋りは？」

ベルゼビュートは笑いながら訊く。サタナスは

「この世の地獄を見た…それだけだ…」

「キキキ…！そりゃあよかった、ってことはアンタが記念すべき5001体目の俺様のコレクションというわけだ！」

サタナスはそれを無視して、どこかへ去った

「クキキ…！いずれは魔王やアスタロトも…」

一人だけの会議室は寂しく、そして、男にとっては良い時間だった…

第23話「決着」(後書き)

ごつつツカレマス

一応SBCについて

一人目、グリドル・マーモン

そんなに表に出てはいなかったけど卑怯者、SBC6位

二人目? エンブ・レヴィン

庵次にやられた、SBC三位

三人目スロス・ベルフェゴール

TYPE一龍ドラゴンの士助にやられた

SBC5位

三人目ラス・アスモディウス

自殺を試みるが失敗、庵次に殺される

SBC4位

4人目プラド・ルシフェル

士助と正々堂々と戦うが負けて、サタナスに殺された

SBC2位

ラーズ・サタナス

SBC最強、ルシフェルとは大差が広がるぐらい強い

グラニ・ベルゼビュート

SBC最弱、死体マニア、何考えてるかわからない、でも頭良い

そんな感じ気になることとかあったら尋ねておくれ
それではさいなら

第24話「思いに思って」(前書き)

長期にわたる休載申し訳ありません

この小説を期待してくださっている方達に多大なご迷惑をおかけしました

しかし、また頑張って行きたいと思えますので応援をよろしく願います

第24話「思いに思って」

士助の部屋、士助はベッドの上にいた

ルシフェルとの戦いのあと、士助は考えていた
もし、あのサタナスが自分以上の実力を持っていたらと。

もし、勝てずに大きな犠牲を払ってしまうことになってしまったら。
そんなことを1日中考え続けていた。

しかし、そんなことを考えていてもしょうがない。

なので、明日は学校にでも行こうと思った。

幸い、今日サタナス来ないのを考えればおそらく明日も来ないだろう。

サタナス自身もおそらく、最高のコンディションの士助と戦いたいのだろう。

とにかく、今はそんなことを忘れていつもの生活に戻りたい。

加奈と話をしたり、ヒロトと学校に行って楽しみたい。

そんな感情が士助の中で暴れているようだった。

あゝ！と言って頭をかきむしって土助はベッドに横になって寝た。
明日ぐらいいは楽しくいたいと願って：

翌日、起きると窓の外から、チュンチュンと雀の鳴き声が聞こえる。
起きて制服を着替えてドアを開けて出ると、館には誰もいなかった。
正確には人の気配がなかった。

あたりを見回してみても、誰もいない。
とりあえず、朝ごはんを食べに食堂へと向かう。

いつもなら

いつもならいるはずのコックすら見当たらない。
何かあったんだろうか？と思いキッチンに入ると置手紙が。

『もう疲れました、休ませてもらいます』

と書かれていた。その隣には赤い何かがついた包丁があった。まさか…と思って匂いをかいでみる。

それは血、ではなくただのトマトの匂いがした。

「なんかあったのか…」

士助は怪しく感じていた。

誰もいない館、居るとしても自分のみ。

気配も感じない、そして、この手紙。

疲れた？生きるのに？まさか！落ち着け！この手紙を書いた人！

一旦落ち着いて息を整えてそんで…

と考え込んでいると、

カツ…カツ…

と足音。さっきまで誰もいなかったのに！何で急に！

あわてて身を隠す士助。

とりあえず、音のした方を見える。

音がしたのは、入り口付近、今入ってきたばかりなのだろうか？

何はともあれ、

「侵入者か…退治してやるぜ」

そう言うと、急いで走って音の方へ向かう。

そこには、怪しい人影、辺りをキョロキョロ見回している。

「怪しい…」

物陰から人影を観察する土助

しかし、間もなく人影は士助に対して背を向けた！

「俺に背を向けるなんて……だったら、気絶させてさっさと警察に行かせてやるぜええええ!!」

物陰から飛び出して、人影に飛び掛る！

近くで見ると、コートを着ていて背は高い。だが女性で、どこかで見たことがあるような無いような：髪は長くて、黒い髪。

どこかのメイドさんじゃないか？ いや、ていうかこのメイド

さん

なんじゃないか？いや、ていうか…マリアさんだな…うん…
しかし、士助は空中に飛んでいてもはや、止まらない。
どうすればいい！？と頭のなかで考えていると

「うおっ！」

胸倉をつかまれて地面に叩きつけられた。おもいつきり。

ドスン！という音が響き渡り、士助は手をはなされると、それはやはり

メイドのマリアさんだった。

彼女は慌てて

「ああっ！大丈夫ですか！すみません手荒な真似を…」

こっちに来て怪我は無いかを確認した。

無いとわかったら、良かった…と胸を撫で下ろし質問をしてきた。

「何でこんな時間帯に士助さんがここに？」

「え…いや、起きたら皆いなくて、そんで探し回って…」

その時士助は思った。こんな時間？え、今って一体何時…

「すみません、今の時刻は…」

「もう11時ですが」

「え！そんな時間…じゃ、じゃあなんでだれもない…」

「今日は皆さんお休みですから。私は一応見に来ただけですから」

全て解決した。つまり、

士助が寝過ごして今日は皆が休暇をとってマリアさんは様子を見るに

来て、

それを士助が勘違いした。そういう訳だ。

それがわかると士助は部屋に戻りバッグを取って学校に向かった。

学校にて：

遅刻して、ヒロトに散々怒られた。

まあ、俺は悪くないけどね。

残りに授業を受け終わって、時間は昼休み。

屋上で士助とヒロトはご飯を食べ終わり話をしていた。

「なあ、士助」

「んー？」

「お前ってさあ、部活とか入らないのか？」

「部活？なんじゃそら」

ヒロトが簡単に説明してあげると

「へー」

「どうだ？少しは興味が出たか？」

そうでもない顔をしていたので

「よし！放課後は部活めぐりに行くぞ」

「は？」

放課後：

その言葉どおり士助とヒロトは部活見学に行っていた。

まずは、サッカー部。

士助は頭に？がついていたのでヒロトがルールとかを教えると

「へえ…やってみるかな」

と興味を持った。

士助のポジションはフォワード、それもチームに入って実践形式なので

相手も自分も11人。初心者なのに、大丈夫だろうか…？

試合開始のホイッスルと同時に試合にボールがわたった。

おそらく、サッカー部員も士助の実力が未知数なのでそれを知るとめだろう。

「いけ士助！ドリブルで抜いてシュートでゴールを決めてやれ！」

しかし…事態は深刻。何故なら…

士助はヒロトのルールを聞いていた。少々適当に聞いているな、と思わせるような感じで。なので、士助は少ししかルールを覚えてなかった。

そのルールが、ボールを蹴って相手のゴールに入れると1点だ、なのだ。

つまり、ということか。

単純脳の士助が読み取ったのは、ゴールにボールを蹴ってぶち込む。それが、いかに危険か。

思い切り足を引いて、ボールを蹴る。

そのキックは悪魔と戦う時に使用するようなキックだったので、ボールが

なんとかその威力を抑えたもののそのボールの威力は人間が蹴って作り出せる威力ではない、なのでボールは凄いスピードでゴールへと向かう。

しかも、途中選手を巻き添えに。

ゴールキーパーも恐ろしくなってボールを間一髪でかわす。

ゴールネットがチリチリと音を鳴らしながら、ボールに焦げ目をつけられた。

「よっしゃあ！まず1点ー！！」

ガッツポーズを決めるが、士助以外の人間は震えていた。

被害者：21人中／4人、致命傷、または重症：1人

という結果になった。サッカー部でこれなので他の部も危険極まりない。

なので、士助が入部するのは、これから先永遠ないだろう。

そのあと、館にて…

全員休暇をとってるもののさすがに加奈はいた。

どうやら、11時のころは加奈は外に出かけていたらしい。

そして、この話をすると加奈は良くやった、と褒めた。

何故？とヒロトが疑問に思う中で…

第24話「思いに思って」(後書き)

いかがでしたか？

今回は作者同様土助も休暇をいただくということで、
お願いします
それでは、また明日

主要人物、世界について（前書き）

いまさらですが、人物紹介をはさみます

主要人物、世界について

虹色士助

年齢…不明（人間年齢17歳ぐらい）

特徴…ツンツンとした髪型　いつもジャージ

趣味…刀、剣集め　ボーっとする　寝る　食べる

好きな物…美味しい料理　戦い

好きな言葉…因果応報（なんか頭良いやつが言いそうだから）

嫌いなもの…虫　卑怯者

今一番やりたい事…長期間にわたる睡眠

千里加奈

年齢…17歳

特徴…黒のロングヘアー 中くらいの背丈

趣味…ヒロトを拷… 拷問器具を集め…

ティー

タイム

好きな物…紅茶 お菓子（甘いもの）

好きな言葉（言ってもらいたい言葉）…もう許してください

嫌いなもの…虫 精神力のある人間 拷問・尋問に慣れて（自主規制）

今一番やりたい事…ヒロトに苦痛をあた（自主規制）

綾風ヒロト

年齢…17歳

特徴…少し茶のかかった短髪 少々つりあがっている目

趣味…（ツッコミ） お菓子のオマケの玩具を集める 読書

好きな物…小説 世界遺産

好きな言葉…ここは俺に任せろ（一度言ってみたかった）

嫌いなもの…苦いもの 病気 いつもと雰囲気の違い加奈

今一番やりたいこと…とりあえず玩具コンプリート

有木藍

年齢…17歳

特徴…黒のポニーテール 高めの伸長

趣味…動物と遊ぶ 新種の動物とかを探す

好きな物…動物 洋食 ハリー（ハリネズミ）

好きな言葉…共存世界

嫌いなもの…風紀を乱す者 時間にルーズな奴

今一番やりたいこと…キツネを飼う

虹色庵次

年齢…不明（人間年齢19歳ぐらい）

特徴…黒髪 of ショート 黒いコート

趣味…特になし

好きな物…戦い

好きな言葉…弱肉強食

嫌いなもの…弱者 卑怯者
今一番やりたいこと…多種族の全滅

虹色殿着

年齢…不明（人間年齢21歳ぐらい）

特徴…金髪のショート 黄色の目 ヘッドフォン

趣味…ナンパ

好きな物…綺麗な女性 カワイイ女の子

好きな言葉…容姿端麗

嫌いなもの…邪魔者 戦い 弱者

今一番やりたいこと…デート

ミカ・エルシエール

年齢…不明（年限年齢16歳ぐらい）

特徴…金髪のロングヘア

趣味…料理 花の手入れ

好きな物…土…花

好きな言葉…世界平和

嫌いなもの…虫 多民族

今一番やりたいこと…士助に会いたい

悪魔

下級悪魔「アベアー」

能力はいたずら程度。人型や動物型、色々いるが大した戦闘能力はない

中級悪魔「デヴィル」

戦闘能力は中々、SBCの下っ端程度。

上級悪魔「デーモン」

SBC等戦闘に長けた悪魔、デヴィルとは比べ物にならない強さを持っている

最上級悪魔「ディアボロ」

今判明している数で2人

皇帝「ルシファー・セイブス」

大公爵「アスタロト・ポイズニー」

現在、君主の座が開いているのでデーモンはその席を奪い合っている

上級精霊「エリートデーモン」

デーモンの中でもディアボロに近いデーモンのこと

手下にデヴィルを3体持つことが出来る

アモンはサタナキアの手下

後に判明させます

悪魔の武器等について

「フォース」

アモンやルシフェルが使っていた手に集中させて使うエネルギーのこと

力という意味を込めてフォースという名にしている

「ジャンプ」

高速移動のこと

跳躍するように足をつかう意味が込められている

「魔掌」

悪魔だけが使えるパンチのこと

その威力は最高

「魔銃」

悪魔の研究員が開発した銃

悪魔だけが使える

「魔力」

悪魔が持っている力の総量

戦闘力・精神力・基礎体力からなる

感じ取れる魔力が大きい程その悪魔は強く、強い者なら重力の様に
思わせられる

アモン…デヴィル
サタナキアの配下
士助に敗れた

グラニ・ベルゼビュート…デーモン

SBC7位?

未だ謎に包まれている

グリドル・マーモン…デーモン

SBC6位

「強欲」をつかさどる

どんな手を使ってでも勝利を欲する

スロス・ベルフェゴール…デーモン

SBC5位

「怠惰」をつかさどる

チャンスのあるときにしか手をださない面倒くさがりや

ラス・アスモディウス…デーモン

SBC4位

「色欲」をつかさどる

見た目に気を使い、どんな場合でも美しくないと嫌

エンブ・レヴィン…デーモン

SBC3位

「嫉妬」をつかさどる

相手の方が実力が上とわかってても負けは認めない主義
素晴らしい力を持つものが憎い

ブラド・ルシフェル…デーモン

SBC2位

「高慢」をつかさどる

自分より弱いものを見下している

ラーズ・サタナス…デーモン

SBC1位

「憤怒」をつかさどる

憤怒という言うものの才能のあるサタナスは弱者とかかわりを持たないの

怒ったことが無い

強い者と戦い自分の方が上と証明することを心得ている

士助のいる世界について

異世界

多くの種族が生きている

基本的にエルフ、ゴブリン、ピクシーなどがある

玄龍族について

玄龍族の特徴として硬い皮膚。人間の兵器などでは傷一つつかない。少数になった理由は、過去にあった「玄龍因子殲滅」によって数が劇的に減った。その硬い皮膚の対策として

「龍殺しの短剣」ドラゴンキラーグラディウスという多種族の研究

によって生み出された、ドラゴンを殺すことの出来る剣でさされ一撃で死んでしまうということがあったため、数が減った。

玄龍族は戦闘に長けており科学的にも医学的にも発達したため圧倒的な戦力を所持した。

強い者なら一人で国をつぶせる

主要人物、世界について（後書き）

そんな感じです

それ以外に何かあったら質問してください

第25話「VSサタナス」(前書き)

2日もサボりました
すいません、頑張ります

第25話「vsサタナス」

ついに決戦の日が来た。

士助が異空間で待っているとやはりサタナスは来た。

「来たか…」

「フン：キサマも逃げずによく来たな」

士助は刀を構え、サタナスは銃を抜いた
2人はしばらく相手を睨み合った

「行くぜっ！」

士助が襲い掛かった。

サタナスは士助の攻撃を銃で防ぐと士助を蹴り飛ばし、銃を向け

「『デビルショット悪魔の銃撃』！」

引き金を引き銃を放つ。以前見たのよりも少し威力が上がっており
士助もなんとかかわしたぐらいだった。

（今日まで鍛えてたのかよ…）

「どうした、考え事か？ だったら…」

サタナスはジャンプして、士助の前に来て

「魔掌！！」

0 距離の魔掌を喰らわせた。

「ぐっ！」

士助は吹っ飛び体勢を取り戻すが、サタナスはこちらに銃を向けており

引き金を引く。が、さっきの様なレーザーではなく単調な銃弾を撃ってきた。

「さっきと何か違うのか…？」

何かわからないままなので士助はあっさりかわすがその銃弾は士助を過ぎた

あたりで方向を士助に変えて士助に着弾する。

「がっ！」

それを見たサタナスはもう一発。士助は今度こそかわそうと試みるが銃弾は追尾してくる。

「だったら…」

士助は距離を離してある程度距離を離すと、銃弾の方を向いて手を後ろに持っていていき、後ろで何かをつかむ。その垂直線上にはサタナスがいる。そして、銃弾がもう目の前まで来ると

「幻影のマント（ミラージュマント）！」

掴んだ物を前に投げるようにかざすと、薄っすらマントの様な物が見える。

そのマントに銃弾が着弾すると、跳ね返りサタナスに当たる。

（威力が…上がっている？）

サタナスは地面に倒れるとすぐに立ち上がる。士助の方をよく見てみると

その辺りがゆがんで見える。

「それはお前の新しい武器か？」

「ああ、これが使い時かと思ったもんで」

ゆらゆらと見える士助のマント。それはその居場所を確認しにくい。もし、マントの場所に銃弾を撃ってしまうと…

サタナスは短い時間の中で一瞬で推理した。

（銃弾は跳ね返り戻ってくる。それも、マントの性質はおそらく倍返し。）

迂闊に撃てば俺にダメージがかかる…試しに悪魔の銃撃を撃ってみたとしても

倍返しで帰ってきてしまう。ならば…）

サタナスは銃を一旦しまった。

そして、深呼吸をすると、拳にオーラを纏わせた。だが、魔掌ではない。

「なんだ？銃やめんのか？」

「どうせ通じない：なら、接近戦だ！」

強く踏み込み、士助に近づき殴りかかる。それを士助は片手は刀、もう片方の手で攻撃を防いで応戦する。

激しい攻防が続く、お互いに少しづつ攻撃を食らわせていく。

このままでは進展がないと思ったサタナスは少しの隙、それもほんの一瞬

を見逃さず、すぐに銃を抜き取り士助を撃った。

それが当たると、のけぞり大きな隙が出来た。

「魔掌！！」

士助の腹に喰らわせた、と思ったが士助は間一髪、手で止めていた。

「危ねー：ギリギリだったぜ：」

「フン、やるな」

2人とも後ろに下がって、お互いのタイミングを探っている。

士助はこの時思った。

（サタナスのさっきの魔掌：予想以上に軽かった。本気じゃあない、ってこと

がわかる。どうする？ここでTYPE一龍になるのも…）

そう考えているとサタナスは動きを止めた。

「どーした？負けでも認めんのか？」

「お前の行動で確信したんだ」

「何をだ？」

サタナスは魔銃を取り出すと1発撃った。何の変哲もないただの銃弾、

だが、士助は幻影のマントを使わず普通にかわした。

「やはりな…」

「もしかして気づいたのか？」

魔銃を両手で持つと、サタナスは魔力を込めて銃を2つに分けた。つまり、サタナスは2丁拳銃に持ち替えたということだ。

「なんか、変わったか、ソレ？」

「今、教えてやる」

2つの銃口を士助に向けるとそれを放つ。スピードは速い、がエネルギー弾

つまり魔銃のようなりロード無しでは無くなった。

しかし、サタナスはわかっていて。それであることがいかにこの勝負を有利にするか。

「やっぱりバレたか…」

士助は難なくかわす。しかし、それはサタナスの疑心を確信に変えた。

「やはりそうか…その幻影のマントの正体わかったぞ」

「いつわかったんだ？」

「攻防の時にふとよぎったことを確認しただけだ。その幻影のマントは

‘エネルギー弾しか跳ね返せない’ということにな」

サタナスが銃撃をやめて接近戦に持ち込んだ時、サタナスは1回だけ銃を撃った。しかし、あまりにも一瞬だったためサタナスは魔力を込める暇が無かったので、あらかじめ銃に入っていた銃弾で攻撃するしかなかった。

だが、サタナスは撃った後に気づいた、マントで跳ね返されると。その一瞬といえどマントで跳ね返せる余裕はあった。でも、返さなかった。

これがあらわす意味はマントが跳ね返せるものは限られている、ということ。

そして、さっきの試しの1発でわかったことが銃弾だけだと。

「なるほどねえ…」

「だったら、この実弾使用の2丁拳銃、『ガン・オブ・サタン』でお前を倒す

そして、俺は俺も存在意義を示す!!」

銃を連続で打ち続ける。遠距離なんだから、近距離でと言いたいがあの銃は近距離にも向いている。ので近づけない。

「クソッ…どうすれば…」

「どうした? 諦めたか?’

ダン! ダン! と銃弾を撃つ。勿論実弾なのでリロードが必要なので、隙が多少見分かるが、サタナスは使い慣れており片方のリロードの時に

片方で撃つという戦いかたをしている。

「仕方ねえか、だったら!」

士助は幻影のマントをかざした。すると、士助はマントの中に隠れた。

「血迷ったか！だったらそのマントの中で死ね！」

サタナスは銃を向けて、マガジンの中の弾がフルの状態になると

「デビルフルバースト悪魔全弾発射，！！」

銃の中の弾を一度に全て発射した。その銃弾は全て士助の方へととんでマントに全て当たった。

（流石に死んではないが、どうなった？）

周りをキョロキョロ見まわしながら弾をリロードするサタナス。

「そんな余裕で大丈夫か？」

と目の前に士助が現れて銃を破壊し、蹴り飛ばした。
その姿は

「TYPE―龍！！」

に変わっていた。

「そうか…そのためにあのマントを使って自分を覆ったのか」
「そのとうり。それにしてもお前頭良いな…」

サタナスは立ち上がる。銃は破壊され、今の士助相手に接近戦。非常にまずい。

「仕方ないな…」

サタナスは力を抜いたあと魔力を練り始めた。

「そうはさせるかよ！」

士助は一瞬で移動して、サタナスに強烈なパンチ。そして、蹴り上げ、

叩き落とし。叩きつけると刀を出して、縦に持つ。そして、

「玄龍乱舞、虹…」

とその瞬間に士助は強烈な光に包まれて、地面に着いたところにはサタナスはきえていた。

「！どこに行きやがった…」

力はどこにも感じられない。が1つだけおかしな物がある。

「黒い…霧？」

少し隣に黒い霧、それも厚い霧があった。すると、中から手が出て来て

士助は引っかきに来た。ソレを、かわすと中から何か出てきた。

「この力を使うまでに倒しておいた方が良かったかもしれない…」

それは、サタナスだった。羽が大きく広げられ、爪は鋭く体には所々に何か紋章のような物がある。

「なにそれ…」

「この姿、名を、ファースト・ディアブロ、使っている時だけ力はディアブロに匹敵する」

「強そうだな…」

「強そう？ちがう、最凶だ！」

サタナスは士助に飛び掛り士助は刀で防いだ。

その衝撃は辺りに広く響き渡った…

第25話「VSサタナス」(後書き)

投稿時間遅い：

頑張った結果がこれだ。

最後まで読んで頂きありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9784x/>

我龍転生

2011年12月6日23時46分発行